

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Essay on the Founding Myth of the Traditional Kingdom of Burma

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004175">https://doi.org/10.15021/00004175</a>

## ビルマの建国神話について

田 村 克 己\*

### Essay on the Founding Myth of the Traditional Kingdom of Burma

Katsumi TAMURA

This article examines the legitimation of kingship in the traditional kingdom of Burma by analysis of its founding myth, recorded in written form in the chronicles. Part III of the Glass Palace Chronicle, “*Hman-nan-Maha-Yazawin*”, includes many myths of various motifs as well as versions of the same motif, and its story unfolds from the creation of the world to the making of the human world, passing through two tales of visiting on another world by the founders of the *Thayehkettaya* dynasty, which imply the change over from nature to culture by their representation of the incest motif. The Chronicle also repeats the theme of the hero, the founder of a new dynasty as well as a usurper: an ideology which contradicts the idea of succession through legitimate lineage. This ideology of succession based on royal blood is paralleled by another based on *karma*, the wheel of fortune in Buddhist thinking. In the myths these ideologies are reconciled by woman, a mediator, albeit an ambivalent one. The woman in the myth is also related to the representation of indigenous people and their power.

- |                   |               |
|-------------------|---------------|
| 1. はじめに           | 2.5. パガン朝     |
| 2. ビルマの建国神話       | 3. 建国神話の構造と意味 |
| 2.1. タガウン朝        | 3.1. 開闢王の伝承   |
| 2.2. タイェーケッタヤー朝前史 | 3.2. 二つの流浪譚   |
| 2.3. タイェーケッタヤー朝   | 3.3. 三領域と王権   |
| 2.4. パガン朝前史       | 3.4. 女性・王権・仏教 |

\* 国立民族学博物館第2研究部

**Key Words:** Burma, kingship, founding myth of the kingdom, buddhism, woman, cosmological realms

キーワード: ビルマ, 王権, 建国神話, 仏教, 女性, 宇宙領域

## 1. はじめに

ビルマは、東南アジアの最も西に位置する。西のインドとは海陸両路を通じ、北東の中国とはシャン高原を経て古くから交流を持ち、これら両文明の影響を受けており、また東のタイなどとも深い関わりを持ってきた。しかしビルマは、南のベンガル湾に注ぐイラワジ川の流域にひろがる平地が、三方を山脈や高地で囲まれるという自然条件もあって、歴史を通じ、政治的・文化的に一つの独立した領域であり続けた。

ビルマ平地部には、紀元前後からピュー（Pyu）という民族が展開しており、その都市国家タイエーケッタヤー（Thayekhettaya）は4-9世紀にかけて大いに栄えた。それが中国雲南の南詔の攻撃を受け減んだ後、北東のシャン高原から、ビルマ民族（Bama, Myanma）がイラワジ（エーヤーワディ）川流域へ進出する。彼らはやがてパガン（Pagan）に王朝をたて、11世紀のアノーヤター（Anawyahta）王のもと、先住のピューを吸収し、海岸部に栄えていたモン（タライン：Mon, Talaing）民族の国家を征服し、ビルマ世界に初めて統一した権力を樹ち立てる。パガン朝は、上座部仏教を王権の基盤とし、ヒンズー文明の影響を受けた宮廷文化を形成し、以降のビルマ世界に登場する諸王朝は、基本的に、この王権のあり方を踏襲していった。19世紀の植民地支配に至るまでの、こうした王朝興亡史は、ビルマ民族を中心に、モンやシャンの諸民族がしばしば覇権を争う形で展開していった。なおベンガル湾に沿うヤカイン（アラカン：Yakhaing, Arakan）地方は、紀元千年前後からビルマ世界に組み入れられるが、西方からヒンズー文明やイスラム文明の影響を直接に受け、半ば独自の政治的・文化的領域を長く保ち続けた。

ところでビルマの建国神話は、王朝の年代記の中に既に文字化されてある。現存する最も古い年代記は、16世紀初頭の『マハーサンマタ年代記』（Mahasamata Rajavamsa：後世『高名年代記 Yazawingyaw』<sup>ヤザウインギョウ</sup>という）で、その名にあるマハーサンマタ王が世界の始まりの王、インドのシャカ族の祖であるように、インド史、セイロン史、ビルマ史の順の三部から成る。前の二部はセイロン史の『大史』<sup>マハ・ヴァンサ</sup>（Mahavamsa）に基づいており、その「王統と仏教の正統性を主張する記述方法」がそのまま三部のビルマ史の記述に取り入れられ、「ビルマの王権と仏教の正統性、神聖性」を主張している。これ以後の年代記もほぼこの形式を踏まえているが、『高名年代記』のビルマ史がタイエーケッタヤー朝から始まるのに対し、後世のものは、タガウン（Tagaung）朝の伝承が付加されている。この点は、「タガウン建国神話が比較的後世

の伝承」すなわち、13世紀以来のシャン民族の大移動以後、ビルマ化したシャンによって作られたのではないかと推測されている。そしてそれがビルマの年代記の中に定着し、一連の建国神話が完全な形で記録されるのが、19世紀前半の『フマンナン・マハーザウ・ウィンドーギー』(Hmannan Mahayazawindawgyi) においてである【荻原1977】。

本論は、この『玻璃王宮大御年代記』に記された伝承を通して、神話分析の一例を示すとともに、その建国神話の意味するところを明らかにするものである。とはいっても、この年代記の全体を扱うわけではない。既に述べたように、年代記の一、二部はインド、セイロンの伝承であり、他方、四部以降のビルマ王朝史は主に歴史学の課題である。神話として問題となるのは、三部、すなわち、タガウン朝の創始からパガン朝のアノーヤター王の御代までである。それは、架空の王朝から、歴史的に治世の明らかな最初の王に至る間である。本論は、この三部を論ずるが、あらかじめ以下の立場を述べておきたい。

まず、ここで扱う神話は、文字化され、しかも年代記という史書の形をとっている。年代記の中でも異伝が記されているように、元来は、さまざまな伝承が口頭、あるいは文字によって伝えられていたのであるが、それらに取捨選択が加えられ、修飾も施され、以下で示すようなものとなったと思われる。本論では、年代記の神話を分析・分解し、またそれと年代記以外の伝承を比較することで、ビルマの建国神話の「本来の」形や、その「形成・発展」を明らかにするわけではない。それよりも、さまざまなモチーフの諸神話（および同じモチーフの幾つかの異伝）が、年代記という一つのテキストの中で、どのように組み立てられているかを問題とする。そして、テキスト、すなわち年代記の三部が、全体としてどのような構造を持つのかを論じる<sup>1)</sup>。

しかし、こうした作業を行なうためには、扱うテキストの全体像を示す必要がある<sup>2)</sup>。それゆえ、第二章ではまず、対象となる『玻璃王宮大御年代記』の三部を、できるだけ細部をも含め紹介していきたい。それがどのように組み立てられているかという先の課題は、次の第三章で明らかにされよう。そして、第三章では、年代記の中でくり返されるテーマについて考察する。それは、年代記のビルマ語ヤーザウィンが「王権・王統」を意味するように、王権のあり方を問うものであり、年代記の編纂の意図するところとともに、ビルマの歴史と文化を貫き規定してきたテーマでもある。

1) 大林 [1975, 1984など] は、日本神話についてこうした方法論で分析している。

2) 『玻璃王宮大御年代記』の三百十五部は、英訳されている [PE MAUNG TIN and LUCE 1923]。本論は、最近 (1994年) ビルマにて刊行された版およびこの英訳本をテキストに用いる。なお物語の引用は、基本的に英訳本の箇所を示す。

## 2. ビルマの建国神話

### 2.1. タガウン朝

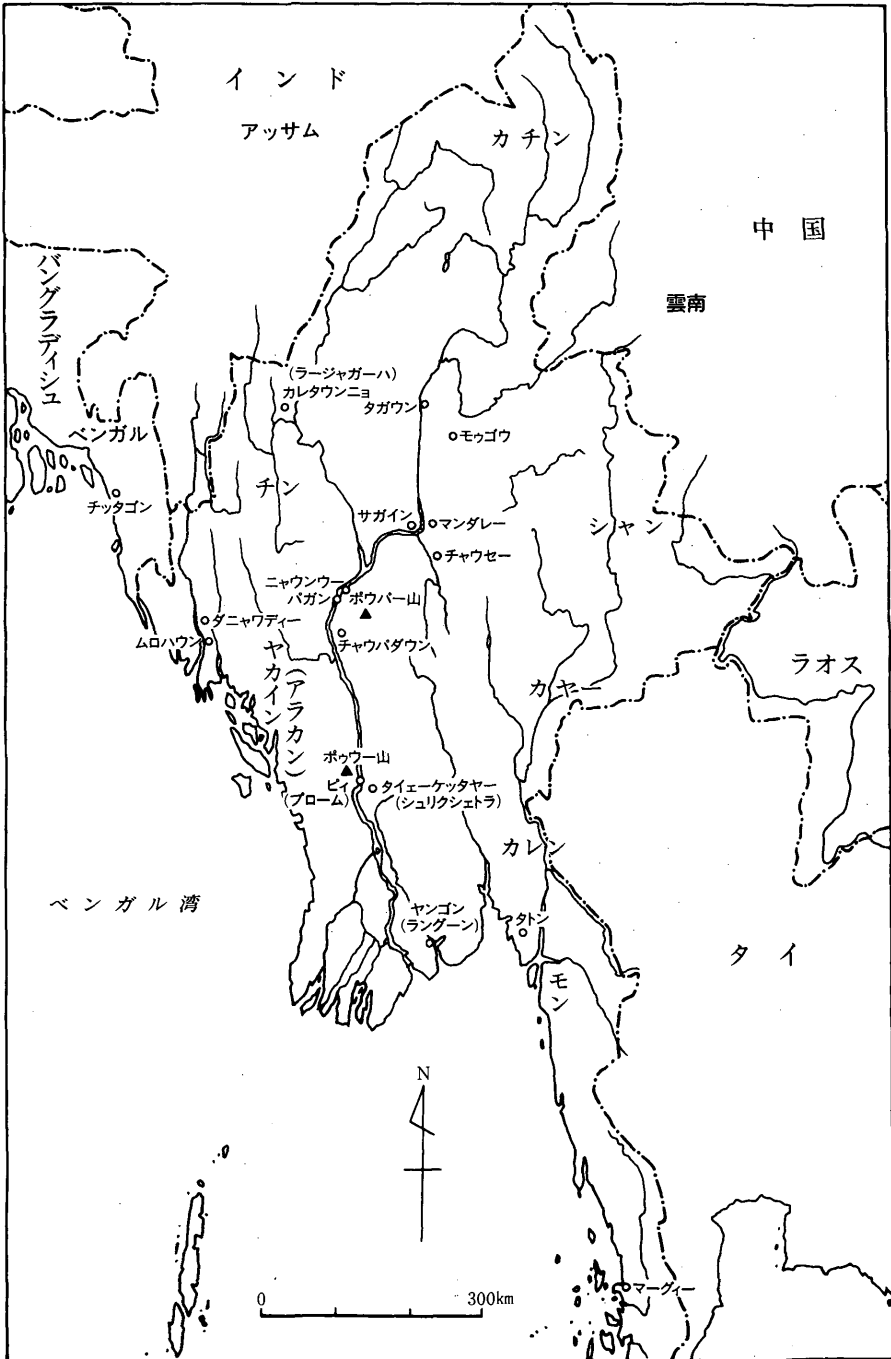
#### (i) 建物造り競争

タガウンの最初の王統は、釈尊の時代のはるか以前に始まる。物語の発端は、インド（「中つ国」）である [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 1-2]。

コーサラ (Kosala) とパンチャーラ (Panchala) の二つの王国の支配者パンチャーラ王は、コーリヤ (Koliya) の王と婚姻による同盟を結ぼうと、大臣を送ってコーリヤの女王に結婚を申し込むが、生まれを誇るコーリヤ王は断った。その結果、大きな戦争が両王国の間で起こり、パンチャーラ王が勝利し、コーリヤ、デーワダハ (Devadaha)、カピラヴァストゥ (Kapilavathu) の三王国のシャカ (Sakiyan) 族諸侯は互いに孤立し、国は破壊された。……この時、カピラヴァストゥのシャカ・シャカ族の王アビヤーザー (Abhiyaza) は、その全軍を率い、「中つ国」を去り、ティンガッタラタ (Thingattharatha)、すなわちタガウンの土地に拠って治めた。……

アビヤーザーが死ぬと、二人の息子、カンヤーザーヂー (Kanyazagyi) とカンヤーザーンゲー (Kanyazange) が王位をめぐる争った。しかし、賢明な大臣が、「もし、あなた方王子が大きな戦さをなさいますと、この国の諸ゆるものに破滅が来ましょう。憎しみの争いをなさるのでなく、徳の争いをなさませ」と説き、そこで王子達が「どのようにして」と尋ねると、「王子様！ お一人ずつ、大きな寄進小屋を一晚のうちに建てるのです。そして先にこの仕事を為しとげた者が、お父上の後を継いで王となられるのです」と大臣は答えた。王子達は同意し、それぞれが一つの丘に陣取って、大きな寄進小屋を建て始めた。カンヤーザーヂーは、頑丈な木材や竹材を用いたため、建て終わらなかった。しかし、カンヤーザーンゲーは完成させた。というのも彼は、小さな木材や竹で建て、その上に白い布をかぶせ、白く塗りつけたからである。明け方になって、弟の白い建物を見た兄の王子は、彼の一党を集め、イラワジ川を下っていった。……

この兄は、チャウパダウン (Kyauppadaung) の町を建て、七十四年間統治し、更に移って、ダニャワディー (Dhannawati: アラカン地方北部) をとり、そこに新しい宮殿と城砦を造って治めたという。また彼は、初めラージャガーハ (Rajagaha: インドとの国境近く、チン丘陵に位置する) に宮廷を開いたが、この時、ビュー・カンヤン (Kanyan) ・テック (Thek) の諸族の求めに応じ、息子ムドゥセイッタ



地図 ビルマ関係地図

(Muduseitta) をピュー王としたとある。

他方、弟の血統によって、タガウンの王位が受け継がれた。アビヤーザー王から数えて三十三代目のベインナカヤーザー (Bheinnakayaza) の時にガンダーラ (Gandhala) 王国セイン (Sein) 地方のタヨウ (Tayoks) 族やタイェッ (Tarek) 族の圧迫を受けて王国は滅び、王は、マレー (Male) 川流域に居を移した。そして王の死後、従って来た者達は三つの集団に別れたと伝わる。一つは、東に行つて、十九のシャン諸国を建てた者達で、以後ベインナカヤーザーの末裔として知られる。イラワジ川を下つて、ムドゥセイッタなどの住む西方の土地へ移った者達もあり、残りは、王妃ナガーセイン (Nagahsein) とともにマレーにとどまったという。

## (ii) シャカ族の再移住

年代記は、先の出来事が釈迦牟尼仏の現われた頃とするが、続けて、インドのシャカ族の再度の滅亡を語る [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 3-4]。

……サーワッティ (Savatthi) のコーサラの王パセーナディー (Pasenadi) は、カピラヴァストゥのマハーナーマ (Mahanama) 王に結婚を申し込むが、後者は、自らの種族の純血性を守ろうとして、王族の血をひく王女ではなく、奴隷女に生ませた姫ヴァサブハクティヤ (Vasabhakhattiya) 王女を嫁に出した。彼女は王妃となり、王子ヴィタトゥッパ (Vitatupa) を生んだ。王子は成長してカピラヴァストゥを訪れた。彼が国へ戻ると、人々は、彼の居た場所を、奴隷生まれの者の場とののしりながら、乳で洗い流した。王子はそれを知るや、憤り言った。「儂が王となった暁には、奴らの喉から流れる血で洗ってくれよう！」

父王がなくなると、王子は、憤怒を蘇らせ、シャカ族諸侯を滅ぼすべく、四倍もの軍隊をもって三度進軍したが、御仏が防いだ。しかし四度目の時、仏陀は、シャカ族の過去のいきさつを考え、もはや防がなかった。そこでヴィタトゥッパは、大軍とともにカピラヴァストゥに押し寄せ、マハーナーマ王とともに住む者達を除いて、乳呑み児に至るまで諸ゆるシャカ族を殲滅した。「おまえはシャカ族か」と問われ、草を手にして「草！」と答えた者達、蘆を手にして「蘆！」と答えた者達、マハーナーマ王とともに逃れた者達だけが生き残った。それゆえ、シャカ族に三つの階級が生まれ、草を手にして虐殺を免れた者達は「草シャカ族」と呼ばれ、蘆によって免れた者達は「蘆シャカ族」と呼ばれ、マハーナーマ王に身を託し逃れた者達は「シャカ族」そのもので呼ばれた。……

シャカ族諸侯が滅びた時、シャカ族の王ダザヤーザー (Dhazayaza) は、従者とともに「中つ国」を去り、まずモーリヤ (Moriya) に拠つて治めた。……

それから再び移動し、ティントゥエ (Thintwe) に拠り治めた。またまた移り、マレー

に住むナガーセイン王妃と会い、同じシャカ族の血をひくゆえ、彼女と結婚し、上バガン (Upper Pagan) に拠って治め、そこで息子のウィラーガ (Wiraga) をもうけた。更に移って、かつてのシャカ・シャカ族の土地、ティンガッタラタと呼ばれたタガウンの国に、宮殿と城砦を建て、ピンサーラ (パンチャーラ) と名づけた。この土地は、ピンサー・タガウン (Pyinsa Tagaung) として知られた。

年代記は、王が三年七ヶ月かかって計画し、上部をナーガ (龍蛇、ビルマ読みナガー) と精霊の手により、下部をティンガッタラタの人々の手によって造られた、黄金の宮殿の様子を述べ、王の灌水式 (頭頂に水を注ぐ儀式) と、それに続く即位式などを語る。この王の治世には四度宝石の雨が降り、その二人の王妃からそれぞれ二十人の王子・王女が生まれ、互いに通婚した。そして、この王統は十七代続くが、最後の王に息子が無かったため、王妃ケインナイデーウィ (Kinnayi-dewi) の弟が後継者になったという。

## 2.2. タイエーケッタヤー朝前史

### (i) 釈尊の予言

タガウンの王統の話は以上で終わり、物語はタイエーケッタヤーに移る。

釈迦如来は、レカイン (Lekaing : イラワジ川中流) から来た二人の兄弟の建てた僧院を嘉し、布施金などを行ない、足跡を二つの岩——山の頂きと川の流れ近く——に印した後、ビルマ・西の地方 (イラワジ川西方) ・セイロンで仏教の根づくことを予言したという。そして、釈尊はさまざまの地を巡錫する [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 6-7]。

彼は、ポウー (Hpo-u) 山の頂きに着き、東南の大洋に牛糞の漂っているのをみとめた。更に、一匹の小さなモグラが鼻で土を掻いて、世尊におじぎをしていた。彼は、この二つの兆しを見て微笑み、従兄弟のアシン・アーナンダ (Ashin Ananda) が「あなたは何故微笑まれるのか」と熱心に尋ねると、こう言った。「わがアーナンダよ、私が涅槃に入ってから百一年目に、この土地に五つの偉大な徴が現われよう。大地は、大きな響きとともに震えよう。ポウーモー (Hpo-u-maw) には大きな湖が現われよう。サモン (Samon) とサミエイ (Samyeit) の川が生じよう。ポウパー (Poppa) 山が大地から円錐の形をとって生まれよう。そして、海の水は、タイエーケッタヤーの礎の回りからひいていくであろう。これらの徴が現われた時、かのもぐらは今の身体から脱けて、ドワッタバウン (Dwatta-baung) なる者になろう。この者は、偉大な都市と王国を築き、王となって宮殿と傘蓋と法をうちたてるであろう。この王より、吾が教えは久しくしてビルマに現われよう。」……



(ii) 隠者となった王嗣

仏陀の足跡と予言を語った後、物語の舞台は、再びタガウンへ転回する [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 7-9]。

世尊が入寂して四十年目、上記ジャカ王から出て十七代目のタドゥ・マハーヤーザー (Thado Mahayaza) の治世に、高さ十二腕尺もある野猪がピンサー・タガウンに出現し、土地を荒らしたため、国境の村に住む人々は戸外に出るのもままならなかった。タガウンの王は、このことを知ると、後継ぎを呼んで言った。「巨大な野猪が国境の村々を荒らしており、人々は働くこともできないと聞く。行け、世継ぎの君よ、退治するのだ！」後継ぎは、「この地上のいかなる敵も私にかないますまい。かの猪が死ぬか、さもなければ私は家に戻りますまい」と答え、五つの武器を手に、猪の出没する所へ向かった。

幾つかの年代記によると<sup>3)</sup>、世子が森で狩りをしている時にかの猪に出会ったという。猪は、すぐれた英雄にあえて立ち向かうことなく、モー (Maw) のジャンの土地、山林へと逃げた。世子は、その足跡を追い、死に慄く猪は山隘に入り込んだ。この場所は今なおウエツウィン (Wetwin) として知られる。『大年代記』によると、猪は、そこから南西へ逃げ、イラワジ川を渡ったというが、その身体が余りにも大きいため、川に入っても腹の皮も濡れなかった。またこの場所は今もウエマスツ (Wekmasut) と呼ばれる。……ここから猪は逃げ続け、とうとうタイエケッターの地近くの島に至った。この島は今日に至るまでウエツト (Wet-hto) と知られる。

そして、世子は、猪を退治し、ひとりごちた。「この猪を追い誅した。旅はもはや長くなかった。もし私がタガウンに戻り、王に『かの猪は死にました！』と告げても、王は信じないだろう。たとえ私が証に猪を持ち帰り、王に渡し、王が信じたとしても、ほんの一時の覚えに過ぎまい。もはや私も年をとっている。タガウンに戻って世子の楽しみを享受するより、これから僧となって、法説を求める方が良からう。」そこで彼は、行者となり、そこに棲んだ。そしてほどなく神秘的力と高い知識を身につけた。

行者はこうして生活を続け、いつも岩の窪みに小便をしていた。一頭の若い雌鹿がその窪みの水をやむなく飲んだところ、雌鹿はそれから身ごもり、月満ちて、人間の女の子を生んだ。母親の雌鹿は、動物の悲しさで、赤ん坊の泣き声を聞くとびっくりして逃げてしまった。行者は自問した。「ここは人里遠く離れている。私の耳に入る、あの赤子の泣き声は何だろうか。」彼は、回りを見廻し、自分の小さな娘を見た。何と！ 彼女はあまりにも美しく、王族の諸ゆる徴が大小全て備わっていた。そこで行者は考えた。「若い雌鹿がこれを生んだのだ。あれは、私の小水とそこに混ざっていた精液をなめて、そうだ！ 身ごもり、この子を生んだのだ。」そこで彼は、厳かに誓いを立てて言った。「もし私が考えるように、雌鹿が私の子を孕んだのなら、私の人差し指と中指の間から乳が出て、この赤子

3) この年代記は、このように以前の年代記に記述された物語の考証・注釈を入れている。

に飲ませられますように！」すると二本の指の間から乳が出てきて、その子は飲んだ。

そこで行者は、彼女を連れ帰り、娘として育てた。彼女が年頃になると、彼はペーダーイー (Bedayi) と呼んだ。行者に続けて仕えていた諸霊は、彼女にふさわしい衣類を持ってきた。彼女が十七才となった時、行者は思い巡らした。「行者が女性とともに暮らすのはふさわしくない。ましてそれを他人に見られるのは良くない。」そこで彼は、彼女に一個の瓢を与え、そこに穴をあけないまま、それで水を汲んで竹筒に満たすよう命じた。ために彼女は一日中水辺にあって暮れてから戻るようになろうし、たとえできても、終日忙しかった。それからは来る日も来る日も、彼は、娘のペーダーイーにこんな風な水汲みをさせた。

### (iii) 盲目の双子の流浪

続けて、同じ頃タガウンで起こった別の出来事が語られる [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 9-12]。

仏暦四十年——タガウンの支配者タドゥ・マハーヤーザー王の義弟が猪を仕留めるべく追いかけた年である——タガウン王の妃が盲目の双子、マハータンバワ (Mahathambawa) とスーラタンバワ (Sulathambawa) の兄弟を生んだ。王は恥じて、妃に「生まれた二人の子達を始末して、誰にもわからぬようにしろ！」と言った。しかし妃は、自身のおなかを痛めた子ゆえ、彼らを隠した。

仏暦四十九年になって、父なるタガウン王は、妃が子供達を隠していることを知って、「妃よ！ 汝は我が輩の評判を落とすのか。あの兄弟をすぐに殺せ！」と妃に命じた。妃は、王の命令に慄き、もはや彼らを養いおおせなかった。しかし、妃は、「子らをすぐに死なせはしまい！ 私の目の届かぬ所で彼らの運にまかせよう！」と言い、大きな筏を作らせ、できるだけ長く旅が続けられるよう、そこに大量の食料を苦心して載せた。そして、王子達に食料のありかを教え、彼らを筏に乗せて流した。兄弟の王子達は、母親の置いてくれた食料を食べ、流されて行った。

彼らがシッカイン (Sikkaing) に来た時、筏が、川の上に突き出た<sup>にせあかし</sup>針塊にぶつかったところ、ここに住む<sup>ビルマ</sup>羅刹女 (biluni) サンダモッキ (Sandamokhki) が筏に乗り込んできた。そして兄弟の王子達が食事を摂る度毎に、彼女も食べた。突き出した針塊のある所は今日までシッカインと呼ばれる<sup>4)</sup>。……兄弟の王子達は互いに、「食事は初め私達に十分な量だった。でも今はそうではない。何かわけがあるにちがいない。食べる時に我々の手をはっきりさせよう。僕の手と君の手を、なあ兄弟」と言った。そして彼らは手探りして、羅刹女サンダモッキの手をつかんだ。直ちに彼らは鞘から剣を抜き、羅刹女に打ちかかろうとした。彼女は、尤なる王子達の手から逃れようと空しくもがき、死に慄いて、「王子様、

4) 今日のサガイン (Sagaing) である。

命をとらないで！ 若君様の望まれることは何でも致しましょう」と叫んだ。そこで兄弟の王子達は、「鬼女よ！ おまえは我々に視力を与えることができるか」と詰問した。彼女が「できます」と答えたので、王子達は、約束を守ることを誓わせてから、彼女を放した。そこで羅刹女が強力な諸霊や羅刹に相談したところ、この兄弟の王子達から始まる王統が世尊の教えを永遠に護持するさまを予見した強力な諸霊が、目に効くさまざまな薬を遣わした<sup>5)</sup>。そして羅刹女が、筏で流れ下る兄弟に供し、薬を施した。薬を最初に施した場所は今もサグ (Sagu) と呼ばれ、薄明に見えてきた場所はなおユワリン (Ywalin) として知られる。そして、視力を得て王子達が「まわりの空よ！ 中の大地よ！」と叫んだ場所は、モッボン・ミュエデ (Mobon-myede) として今も知られている。

……

さて王子達は視力を得ても、筏での旅を続け、鶴の飛ぶのにちなんでコンサピイン (Konsapyin) と呼ばれる場所に着いた。ここで彼らは筏を止め、五つの武器に身を固めて進み、とうとう、彼らの叔父の行者が修行している土地にやって来た。

コンサピインは今もカウンタリン (Kontalin) と知られる。『シュエジーゴン縁起』 (Shwezigon Thamaing) によれば、王子達が「高台の方が明るい」と言ったことに由る名という。そのため、彼らは、叔父の行者の娘ベーダーイーが水を汲みに行く時にふみかためた跡をたどることとなった。そして、彼らは彼女と会い、その水を汲むさまを見て、「娘さん、あなたが水汲みに使っている瓢は穴がないよ。全く馬鹿気てますよ！」と言った。そこで彼らは、瓢を取り、剣でその表面を切って、種子を外へ落とし、それで彼女に水を汲ませ、竹筒一杯にさせた。さよう、このことから、世の人は、「瓢の把手に穴をあける勿れ」との諺を用いている。竹筒が一杯になると、娘のベーダーイーは、父の行者の庵に行った。行者が「今日は何と楽々と水を一杯にして持ってきたのか！」と言ったので、ベーダーイーは全てを話した。行者が二人の若者を呼び詰問したところ、彼らは、タガウンの支配者の第一王妃ケインナイデーウィの息子達であること、ナーガの息のため盲目となったこと<sup>6)</sup>、羅刹女サンダモッキが治癒し視力を与えたことなどを、余すところなく語った。行者は、王子達の言うところを聞くと、「汝ら双子は吾が甥、吾が姉の本当の息子達だ」と言った。そして仏暦六十年に、行者は、マハータンバワと娘のベーダーイーを妻合わせた。

以上の物語の後で、マハータンバワがピュー王となったことが述べられる。ピューは、ムドゥセイッタの末裔タンブーラ (Tanbula) 王がダニャワディーの捕虜となり、王妃ナンカン (Nanhkan) をいただいていたが、カンヤン族の侵寇を受けたり、弟と王位の争いがあったりした。そこで王妃と人々が、かの行者に頼ったところ、その薦

5) 今日でも、超能力者ウェイザー (weikza) への信仰に基づく集団ガイン (gaing) などでは、諸霊やパルーの力や保護のもとに呪薬を製造あるいは使用し、治病を行なう [土佐 1995]。

6) 第三章一節参照。

めもあって、マハータンバワを彼らの王とした。この王以後、ほぼ全ての王について、年数・治世時の出来事・崩御にあたっての異変・誕生の曜日が記される。すなわち、

仏暦六十年マハータンバワは王となった。彼の二王妃は、ベーターイーとビュー妃であった。そのうちビュー妃は一人の娘を生み、ほどなく崩じた。王子ドワッタバウンをベーターイー妃が懐妊されて三ヶ月で、父王マハータンバワが崩御された。即位されるまで二十年、在位は六年であった。享年二十六才。王の崩御せられる時、七日にわたって地震があった。王の誕生日は月曜日 [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 13-14]。

### 2.3. タイエーケッタヤー朝

#### (i) ドワッタバウン王の栄光と没落

王位は、兄の死後、弟に継がれ、続いてタイエーケッタヤーの王統がいよいよ始まる。まず、一夜のうちに仏陀の予言した五つの兆<sup>7)</sup>の成就したこと、七諸天<sup>8)</sup>の相談の下、帝釈天 (Sakra) とナーガによって、この都市が建設されたことを述べ、帝釈天に導かれドワッタバウンが王位に即いたことが語られる。

ドワッタバウンは、異母妹で、ビュー妃の娘サンダーデーウィ (Sandadewi) と、ナーガの王女ベーサンディ (Besandi) を妃とし、帝釈天から、霊験ある剣をはじめ、五つの王権の象徴物を与えられる。さらに、御座船・槍・鐘と太鼓・天馬・象、十七位の守護霊、国事に長け、八つの徳を備えた、六大臣を与えられたと伝える。王の勢威は宏大で、歩く毎に踏んだ地面が沈むため、帝釈天が鉄板で受けるようにし、また、人間世界全て、遠く阿修羅 (Asura) やナーガの土地まで征服し、貢納を受けた。そのやり方は、詔書をつけた空飛ぶ槍を、王自らが山頂から投げる。すると槍は、諸王の頭上で落ちぬばかりに止まり、諸王が服従し宥しを請うまで去らなかった。また、鐘と太鼓を一打ちすると、あたかも諸王の耳元で打ったかのように響きわたり、やはり彼らが宥しを請うまで止まなかった。そして貢ぎ物だけでなく、人間世界の何百という王が、年毎に、最も美しい王女・象・馬・ルビーや金銀などの貴金属・毛皮・絹・綿の着物を贈ったと言われる。

王は、城外に宮殿を造営して厄除けの儀礼を催し、毎日、三千体の聖人<sup>しょうにん</sup>に四つの必要な什物を施し、全部で十一の仏舎利塔 (Zedi pahto) を建て、また聖人達と相談

7) 前節 (i) 「仏陀の予言」参照。

8) 『玻璃王宮大御年代記』に挙げられているのは、Gavampati, Rishi, Sakra, Naga, Garula, Sandi, Paramesura である。しかし他の年代記では違っていることも記述されている [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 14-15]。

して、法典を用意した。王の治世の間、宝石の雨が五度降ったという。

しかし、この王の勢威も衰える時が来る。以下は、その経緯である [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 17-18]。

さて、ある日、惣菜売りの女性がある聖人に寄進した寺領地のうちのほんの五畝 (pe) を<sup>9)</sup>、この偉大にして強力な王が奪うということが起こった。そのため、帝釈天に与えられた空飛ぶ槍は、もはや王の遣いをしなくなり、大鐘と太鼓は、打ってもなんの音もしなくなった。王が何人かの聖人と相談したところ、彼らは瞑想し、惣菜売りの若い女性によって聖人に寄進された寺領地のうちの五畝を、王が奪ったためと洞察した。そして彼らは、王に次のように言った。「王よ、三宝に関わる、此の世の諸ゆる物は、致命的な毒を持つ蛇である蝮やコブラのようなものです。触られると、重ねて襲ってくるのが、こうした蛇の本性です。そして、襲われると、どんな生き物も重大な災厄を逃れることはできません。同じように、三宝に関わる物が不法に手に入れられると、人は、その諸ゆる財宝を失ない、危地と破滅に陥ち、その命さえも喪うでしょう。王よ、あなたが不法な物を取られたから、この事態がふりかかってきたのです！」そこで王は、五畝の土地を、惣菜売りの女の保護者に戻した。

しかしながら、不法で汚れた物を奪ったため、空飛ぶ槍と大鐘、太鼓は、もはや王の命令をきかなかった。そのため、諸方の王からの昔からの貢ぎ物は届かなかった。王は激しく怒り、ある日、ピインシンビュー (Pyinsinbyu) とピインシンニョウ (Pyinsinnyo) を呼びにやり、「おい！ 大臣よ、我が領土である膽部州の王どもは、貢ぎ物を寄越さない。汝ら行って集めてこい！」と叫び、彼らを送り出した。ピインシンビューとピインシンニョウは、従者とともに、貢ぎ物を集め差し出した。それが七年続いたが、とうとう王は彼らを信頼できなくなり、彼らを欺いて殺した。

彼らの死後、貢ぎ物を集めるだけの力と権威を持つものは誰もいなかった。そこで王は、ナーガの贈った龍船 (nagakye) に自ら乗り、膽部州中を巡って貢ぎ物を集めた。ところがある時、王はパントワー (Pantwa) 王国にやって来たが、パントワーの女王は、胸に悪企みを懐いて、不浄な布 (pahso) を取り上げると巧みに手巾をつくり、王に差し出した。王は女王を信じており、何の躊躇いもなく、何の疑いもなく、その手巾で顔を拭いた。すると王の額の鮮やかな恙が消えた。そのためナーガ王妃ベーサンディは王のもとを去り、王は嘆き悲しんで国に戻った。王は、怒りのあまり、唾を痰壺に吐かず、海の中に吐いてしまった。かくて王の善行の業 (karma) が尽きてしまい、ナーガは、激しく怒って、王と龍船を把え、ナーガの国に送ってしまった。

9) 1ペエ=1.75エーカー。

(ii) 鶏頭を食べた王

ドワッタバウン王の後、王統は、ビュー妃の娘との間にできた息子以下、八代続く。その次に来るのは、タガウン王統の出自でない者である [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 21-22]。

かの国のある住民が、息子を、ある<sup>ひじり</sup>聖に預け、幼い頃から<sup>コイジン</sup>沙弥(koyin)にさせていた。師はこの子を構み、<sup>ピタカ</sup>経典(Pitaka)や<sup>ヴェーダ</sup>聖典(Veda)を教え、沙弥はおとなしく師の用に仕えていた。さて、この師は一羽の雄鶏を飼っていたが、ある日、雄鶏が鳴く度に「私の頭を食べる者は、ンガタバ(Ngataba)王とならん！」と鳴くことが起こった。師は、これに気づき、「かの畜生が鳴くのは何てことだ！」と言い、沙弥を呼んで「小僧よ！ この鶏は鳴くと奇妙なことを口走る。だから、それを料理し、私に出してくれ」と言った。そこで沙弥は、師の言葉通りに鶏を料理した。料理している時、鶏を鍋から取り出そうとしてみると、その頭が外れて、火床に落ちた。頭が汚れてしまったため、少年はそれを洗って食べた。師が、「鶏の頭はどうした」と尋ねると、少年は、「鶏を鍋から取り出そうとした時、頭が外れ落ちました。汚ないので、お出ししないで、自分で食べました」と答えた。そこで師は、「こうなったからには、この畜生の鳴いたことが本当かどうかわかるだろう」と思った。

そこで彼は、宗教や世事や国家についてのさまざまな務めを、沙弥に教え、彼を遷俗させ、大臣の将校に預けた。そこで将校は、彼を息子とし、ふさわしい装束をつけさせた。というも、かの少年は、美しさと叡知と誉れを漲らせ、王たる徴を、大となく小となく全て備えていた。それゆえ将校は常に、行く所はどこへなりと、この少年を連れて行った。ある日、彼が王宮に少年を連れて行くと、王は、少年が賢明に振舞い、王者の資質を持つことを見出し、いたく嘉した。王は子息を持たないため、大臣にその少年を請い、彼を御子とし、大臣から後見の役目を取り除いてやった。それから少年は、王に課せられる務めや、国家の内政を扱うことに通じるようになり、父君の王に高く仰ぎ仕え、さらに法を深く究めた。王も大臣も、兵士も民衆も、俗人も僧侶も、殊の外、彼を愛し、王は、彼を継嗣とした。幾つかの年代記は、王が彼を王女と結婚させたことを加えている。

ドワッタバウン王の血統でない(それゆえ、ンガタバと呼ばれる)この王は、敬虔で、王の務めをよく守り、臣民を我が子のように慈しみ、すぐれた人格を持つとあり、治世の間、七度宝石の雨が降ったなどという。

(iii) 猿に変身した王

ンガタバ王から始まる、いわば第二次タイエーケッタヤー朝は、十六代目まで続く。

この間の各王については、第一次タイエーケッタヤー朝の諸王と同様に、前王との系譜、在位年数、崩御時の異変、誕生の曜日などが記される。何人かの王は敬虔で有徳の人物と書き留められるが、乱暴で、教えを守らず、悪事を行なった王も二、三いる。その中でより具体的に伝わり、興味深いのは、十五代目のアティタヤー (Atitya) 王である [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 26]。

……彼は、悪行の主であった。彼は、自らの母親を凌辱するために、その館を訪れることさえした。ところで母君は、五戒を固く守り、世尊の教えに心の平安を求めていた。加えて彼女は、厳肅な誓いをたてて、「我が徳が失われてないなら、我が子が来た時に、大広間が天蓋のごとくなって仏のまわりに立つように！」と言った。すると部屋の屋板が、彼女のまわりで天蓋のように立ちふさがった。そのため息子の王は恥をかいて戻っていった。彼が戻ってみると、その身体は痒みにとらわれ、宮殿の四隅の池で水浴びしようとする、その身体が猿の毛で蔽い尽くされた。彼はすぐに猿に変身し、しかもはっきりとなったので、全ての知るところとなった。人々は彼に練瓦を投げ槍で突き、彼は死んでしまった。王母は、息子が猿となって逃げる時、王宮から降りて来て後を追ひ、その姿を認めると、「おいで、いとしい主上<sup>アウラウ</sup> (Alaung) よ！」と叫んだ。その場所は今日に至るまで、ラウンターチャウン (Laungthachaung) として知られる。……

#### (iv) タイエーケッタヤー朝の滅亡

背徳の王アティタヤーの後、王位は、その弟と息子との間で争われ、弟のトゥパニャ (Thupanna) が勝ちを収める。新しい王は、徳と学識に富み、高い人格を持ち、ことに仏教の護持に熱心であったが、王朝はこの代で滅びる。それは次のような事件からである [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 26-28]。

かつて王は、当時騒々しかったカンヤンの土地を平定するために、四倍の軍勢を率いて遠征した。その土地を征服した時、王はそこで世尊の黄金の像を見た。それは（普通の人の腕で測って）高さ八十八腕<sup>キョービット</sup>尺もあった。彼は、あたかも世尊そのものに出会ったかのような、尋常ならざる信心の念に満たされ、昼も夜も伏し拝んだ。三年間もそうしてもなお、彼はこの像から身を離すことができなかった。像は、数千万ビス<sup>10)</sup>の黄金何十何百もの重さがあり、未来仏彌勤 (Arimiteyya) に似せて造られていた。

大臣達は、「偉大なる王よ！ 御君の象も馬も従者も疲れています！ どうかすぐに国に戻れますよう」と王の耳に訴えたが、王は、「予は、この仏像をあきらめきれぬ。巨大な、宝石で飾った筏を作り、その上にこの仏像を乗せ、ナギーッ (Nagayit) 山のまわりを迂

10) ビス=重さの単位。

回して、海路、タイエーケッタヤーに運び戻ろう」と答えた。そこで大臣達も従者達も悲痛な思いとなり、「王は出来もしないことを考えておられる。王がああ思われている限り、我々は二度と家族に会えないだろう」と考えた。そこで彼らは集まって相談し、仏像の下に穴を掘った。すると、その像は、純金で鑄造され重かったので倒れた。王が、像の倒れるのを見て、「大臣よ、なぜ世尊の像が倒れたのだ」と尋ねると、大臣達と従者達は、「ご照覧あれ！ 我が世尊が入寂なさったのです」と答えた。王は、この答えを聞くと、悲しみに沈み、押し黙った。そこで大臣達と従者達は、それぞれ、一本の薪と一掬いの炭を穴に押し入れ、火を著けた。王が、火の手を見て、「大臣よ、なぜ汝らは世尊の像を火にくべるのか」と再び尋ねると、大臣達は、「世尊は入寂なさいました。そこで何と！ 諸天が茶毘に付す儀式を行なっているのです」と答えた。王は彼らの答えの本当でないことを知り、悲しみのまま押し黙った。大臣達と従者達は、王が怒るのではないかと怖れ、金の延べ金から、一腕尺たつぷりの高さを持つ、二十八体の世尊の像を鑄造し、王に差し出した。更に彼らは、純金のものを鑄て、それらも差し出した。彼らはまた多くを自分達で取り込んだ。かくて王は、故郷のタイエーケッタヤーに戻った。

しかし、こうした什器が人々によって使われると、この高貴な王国は、七柱の高位霊によって打ちたてられたにもかかわらず、追剥、泥棒、強盗、凶徒がはびこり、秩序乱れ無法の様となった。この時、大きなつむじ風が起こり、籐の箕を選び去った。箕の持ち主の女性は、「私の箕！ 私の箕！」と叫んで、後を追った。そこで国中が驚き、「ソガサゴ（*ソガサゴ*）の戦が起こった！」と言って、人々は、三つに分裂した。王は病いに倒れ崩じた。……

三つに分かれた集団——ピュー、カンヤン、ビルマ——のうち、ピューは内部で戦い、さらにチャビン（*Kyabin*）、テッ、ピューと分裂し、このピューは、最初タウンニョ（*Taungnyo*）の土地を占めるが、タライン、カンヤンの侵寇を順次蒙り、パダウン（*Padaung*）、ミンドン（*Mindon*）と居を変える。やがて、十九ヶ村の長としてタモッダリッ（*Thamoddarit*）王が出て、バガンを舞台とした物語に移るが、その前に、タイエーケッタヤー朝の終末に興味深い話が記されている。話は戻って第一次分裂の後であるが、ピューとカンヤンが互いに戦いを繰り返していたという。

……そこで彼らは、数の多い方に勝利が帰するという取り決めを結んだ。そして、その意図で、ピューはタイエーケッタヤーの西に、カンヤンは北に、それぞれ仏塔（*pahto*）を建てることになり、先に大きな仏塔を完成させた側が勝ちを取めることに合意した。そこでカンヤンは、煉瓦で大きな仏塔を建てたが完成させることができなかった。しかしピューは知恵をめぐらし、竹を仏塔に似せて組み立て、それに白い布を覆い、傘蓋を載せた。



カンヤンはそれを見ると、敗れたことを認め、逃げ去った [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 28]。

## 2.4. パガン朝前史

### (i) 釈尊の予言

年代記は、パガンの都についても、釈迦の巡錫と予言を伝える [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 29-30]。

世尊は、名を顯わされ、「中つ国」から旅をして、この王国の地に着いた。タンヂー (Tangyi) 山の頂きに立って眺めると、急勾配の堤にあるブティ (butea) の木の尖に、一羽の白い鷺と一羽の黒い鳥の止まっているのをみとめた。更に、その木の股のところに、二枚の舌を持つ大トカゲの形をした餓鬼が住み、木の根元に小さな蛙が一匹蹲まっているのを見つけた。そこで彼は微笑んだ。従兄弟のシン・アーナンダーが「あなたは何故微笑まれるのか」と怒りに尋ねると、世尊は予言して語った。「わがアーナンダーよ！ 私が入寂して六百五十一年目、この場所に大きな王国ができるであろう。ブティの木の尖に白い鷺と黒い鳥の止まっているのは、その王国でたくさんの人々が施しを行ない徳を積むことを示している。一方で、徳を持たない、邪悪な人も多くいよう。ブティの木の股に住む、二枚舌の大トカゲの姿をした餓鬼は、その王国の人々が土地を耕すのでなく、売ったり買ったりの商売で生計を立て、その言辭は真実の言葉でなく偽りのものであることを表わしている。ブティの木の根元に蹲まる小さな蛙は、人々が蛙のように冷たい腹を持ち、幸せであることを示している。かの王国の最初の創設者タモッダリッ王の御世に、大鳥、大猪、大虎、ムササビが支配を乱そう。しかし、栄光と力と支配力を十分に備えた王子が、かの四つの怪物、大鳥も、大猪も、大虎も、ムササビも、仕留めるであろう。」

### (ii) 英雄ビューソーティの冒険

先の仏陀の予言は、ビューソーティ (Pyusawhti) 王の手で実現することとなる。その話とは—— [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 30-33]

ところで、マレーの田舎の村々がまだ騒々しかった頃、タガウン王統の直系の末裔で、名をタドゥ・アーディッサヤーザー (Thado Adissayaza) という、シャカ族の王侯が、土地を離れ、丘の上で、菜園作りや田畑の耕作で生活をたてながら、こっそりと身をやつして住んでいた。ところで彼の菜園にはナーガの穴があったが、息子を授かりたいと思う時は必ず、日々ナーガに祈り供え物をするのが、当時の全ての里人・村人の慣わしであった。そうするうちに、タドゥ・アーディッサヤーザーの妃が、良き運命と徳のおかげをも

って懐妊し、月満ちて、諸ゆる王者の徴と美しさを備えた男の子を生んだ。彼らは、彼をソーティ (Sawhti) と名づけた。この菜園に住む、ナーガの王と王妃は、いつもその子を可愛いがり、自分達の子のように愛した。彼が七才になった時、弓術の使い手でもある、この地の一番の行者に預けられた。更に彼は、俗間の書物やルーパニカーヤ (Rupanikaya)、サッドニカーヤ (Saddanikaya) などの聖典をさまざま学んだ。行者は、この若者の身振り、身体つき、容貌、彼の持つ王者の特質や徴を見て、「この若者は、まことの王族の血じゃ、諸ゆる王たる徴と美しさを持っておる。まがうことなく、この者は下流の地で王位を手に入れよう」と言った。そこで行者は、若者の名のソーティを変え、彼をミンティ (Minhti) と呼び、未来の王の知るべき十八の学芸を彼に教えた。十六の時に若者は、バガンの土地に行くのを望み、その王族の父母に暇乞いをした。両親は、彼が下流の地で王になるであろうと、第一の行者が以前言った言葉を思い起こし、彼の出立を許した。そして、王族の父は、宝石をふんだんに鑲めた弓と矢を彼に与えた。この弓は、人の手になるものではない。というも、かの者がバガンの地の諸ゆる敵を鎮め征し、王となり、以後、仏教を守り、それに仕えるのにふさわしい、全て王者の血をひく子々孫々が長く続くとの予言を聞いた帝釈天が、宝石をふんだんに鑲めた、精霊 (nat) の弓矢を彼に与えたという。かの若者は、その弓矢を取り、バガンの土地に行き、ビューの年寄り夫婦のもとに居候した。夫婦は、自分達の息子も娘もいなかったので、ひとかたならぬ愛情と敬意をもって、彼を息子のように世話し可愛いかった。

ある日、彼は持って来た弓矢を試そうと、ビューの老夫婦に暇乞いして、森へ出かけようとした。しかし、まるで我が子のように彼を気づかう二人は、彼を引き止めて言った。「愛し子よ、この土地の東の方には五百頭の手下を率いた大猪がおり、西の方には五百羽の手下を率いた大鳥がおり、南の方には五百頭の手下を率いた大虎がおり、北の方には五百匹の手下を率いたムササビがいる。愛し子よ、この地の主である王さえ、この敵を打ち破れず、毎日、大猪に、米六十山、荷車九台分の南瓜、荷車九台分の糠を与えねばならない。大鳥には、一週間に七人の処女、日に一人の処女を与えねばならない。こんな空恐ろしく奇怪な敵がこの国を苦しめるようになって、今や九十二年となる。」しかし、若者は自らの能力と力を信じていたので、敵の巣窟を探しに出て行った。そして、南に棲む大虎、北に棲むムササビ、東に棲む猪に立ち向かい、王族の父からの弓で、それらを仕留め屠った。

それから彼は、大鳥のいる西の方へ行った。その時、かの鳥への餌を取り扱っている者が、鳥への食料に差し出す七人の女を連れて行く途中であった。若き王子は、この男に会い、何をしようとしているのか、彼に詰問した。鳥への餌を取り扱っている男は、若者に全てを語った。若者は、「おまえが言うことは何と悲しいことではないか——鳥の餌に差し出すとは——私と同じように生きているのに」と言って、七人の女を預った。彼女達は、危地を脱する望みを得て喜び、若き王子のために、熱心に祈り、強く望みをかけた。やがて、かの鳥が、罅から出て来て、王子を見ると、その力と技量をさまざまに示した。しかし王子は、冷静で沈着な性格であったので、恐れることなく、大声を上げて、挑戦の言葉

を吐き、帝釈天の雷挺の付いた矢で、この強大な鳥を仕留め倒した。

……

王子は、死んだ鳥から一本の羽根をむしり取り、七人の女性に頭に載せて運ばせた。彼女達はそれを載せるのに大騒ぎしたという。彼は、「おまえ達行って、それを王に差し出してこい」と言って、彼女達を遣わした。そこで七人の女性は、王に差し出そうと、大鳥の羽根を運び去った。しかし途中で、重いために、それ以上運ぶこともできず、羽根を落とした。その場所は今もフンゲッタウンピッ (Hngettaungpyit) として知られ、大鳥の射たれた場所はフンゲッピッタウン (Hngepyittaung) としてなお知られる。さて、七人の女性が、「大鳥は死にました。若い方の手で仕留められたのです！」と、タモウダリッ王に言上すると、王は、十二年の間、止むなく食い扶持を与えてきた敵が打ち破られ殺されたと聞き、大いに喜び、四個の軍団を率いて、王子の居る所へ行った。そこで彼は、大きさ、高さが小山ほどもある鳥の死体を見た。そこで王は、「汝はいかなる種族のものか。こんなに強大な敵を仕留めた、若き貴公よ。いかなる武器によって、奴らを仕留めたのか」と聞き、王子が全ての事実を王に語ると、タモウダリッ王は「まことに、かの骨と血の者の持つ、栄光と力と知恵を備えておる」と言った。王は、彼を、娘のティリサンダーデーウィ (Thirisandadewi) と結婚させ、彼を継嗣とした。大鳥に食べ物として供えられた人の数は、タモウダリッ王の治世全十二年の間で、四千三百二十人であった。

### (iii) 日の御子と龍女の子

英雄ビューソーティの出生については、以上とは別の話しが記されている。年代記は、幾つかの理由を挙げて、別伝を信ずるに足りないとして斥けているが、それに多くの紙数を費やしていること自体、別伝が根強く流布していたことを示している。それは、先の伝より一層興味深い。すなわち—— [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 33-34]

ナーガ王カーラ (Kala) の子ナガーチャウン (Nagakyaung) の娘で、ザンティ (Zanthi) という名の女ナーガが、徳行を修めるために人間世界にやって来た。彼女は、マレー山の近くで暮らしている時に、「日の御子」と交わり、懐妊した。「日の御子」は彼女を捨て、彼女は、臨月になって、彼に白い鳥を遣わした。この白い鳥は、「日の御子」が紅玉を包んで持たずまで、戻ろうとしなかった。ところで、数人の船主の商人が食事を取っていたが、鳥が、その性から食べ物のおこぼれをつまもうと思い、紅玉の包みを木の股に置いたままにしてしまった。鳥がおこぼれをつまんでいるうちに、商人達は、白い鳥が木の股に置いた紅玉の包みを見つけ、取り上げ、その代わりに乾いた糞の包みを残した。白い鳥は、食べ物のおこぼれを食べてしまうと、その包みを持って戻り、ナーガのいる所に戻り、包みを彼女に渡した。彼女は、乾いた糞を見て悲嘆にくれ、山の頂きに胎内の卵を産んで、ナーガの地へ去った。

この時、精霊が一人の獵師を連れて来た。ナーガが卵を産んだ場所に来て、獵師は、卵を見つけ、それを喜んで持ち去った。しかし、彼は、ひどい俄雨のために、堤から溢れるほどに増水した流れを渡ろうとしている時、それを手から落とした。そして、一個の金の卵は、モッコウ・チャッピーン (Mogok Kyappyin) の国で割れ、この土地の鉄や紅玉となった。一個の黒い卵は流れを下り、ティントゥエの土地に着き、一貴人を生んだ。彼女は、年頃になってティントゥエ王の妃となった。一部の年代記は、それがガンダーラ王国に着いたと言い、別のはタガウンへと伝え、それぞれに別々の話がついている。一個の白い卵はイラワジ川を下り、ニャウンウー (Nyaung-U) に着いた。そして、ミィェゲドゥイン (Myegedwin) 村のパガンの老夫婦が、ニャウンウーの河岸に降りて来て、それを見つけ、水から拾い上げ、トゥーユウィン (Tuywin) 山の麓で信心に勤めている行者にそれを見せた。行者は、知と徳を備えた者であり、予言して語った。「この卵は普通の卵でない。高貴な卵だ。ここから孵ってくる者は、栄光と知恵と、大小の王者の徴とを持ち、全地上の敵を鎮めるであろう。さらに、この者は世尊の教えを護持するであろう。」そこでビューの老夫婦は喜び、それを宝として蔵めた。時が来て生まれると、その子は、栄光と知恵と、大小の王者の徴に満ちており、老夫婦は、自らのおなかを痛めた息子のように、この子を養った。そして彼が成人に達した時、父の「日の御子」がやって来て、彼に、宝石をふんだんに鑲めた弓矢を与えた。それで諸ゆる敵に打ち勝つためである。

## 2.5. パガソ朝

### (i) ビューソーティの王統

パガン王国の継嗣となったビューソーティは、義父の死後、すぐに即位せず、まず、彼の恩人の行者を遷俗させ王位に即けたという。続いてビューソーティ自身が、帝釈天に導かれ、霊界の鼓・琴・喇叭が奏でられる中、登極した。王妃は、タモッダリッ王の娘ティリサンダーデーウィと、ナーガ王から献ぜられた王女イランダデーウィ (Irاندadewi) である。帝釈天から、五つの王権の象徴物とともに、豪華な傘蓋をはじめ玉器類、沼から出てきた空飛ぶ象、川から生じた貴種の馬を贈られ、ナーガ王からは、百千単位の種々の象と馬の贈り物などに加えて、三十八の侍女、王に扈從する百八十人の屈強なナーガの若者を遣わされた。治世の間に三度宝石の雨が降り、これらの時や、即位時、敵を破った時など、あわせて十二度の盛大な祭典を行ない、また、人間世界の諸ゆる王が、賀状とともに、進物や遣い物、処女、宝石、象、馬を贈った。王は、善者の七つの資質を備え、王者の十の務めを怠らず、世尊の教えを守り、諸天と相談して法典をつくり、多数の仏塔、僧院、窟院などを建立し、臣民を我が子のように慈しんだと伝わる。

ピューソーティ王の後、王統は、ピュー王の娘との間にできた息子以下、六代続く。四代目のティンリーチャウン (Thinlikyaung) 王の時、十九ヶ村が解体し、ティリビィッサヤー (Thiripyissaya) の町が建設され、マハーギーリ (Mahagiri) 兄妹の霊がポウパー山に祀られ、王・大臣・人民が年に一度訪れたという。また治世の間、三度宝石の雨が降ったと伝わる。

王位は、その後、王族でない大臣の手に帰し、さらに別の者によって篡奪される。しかし、ピューソーティの王統の最後の王の孫が、隠れ住んでいるのを大臣達に見出され、王位を継ぎ、以下九代続く。二代目の王の時、ティリビィッサヤーが放棄され、タンパワティ (Thampawati) の町がつくられ、七代目の王が親耕の儀式の時に事故死したなどの記事が見られる。

王位は、この後、再び途切れる。九代目の王の妃の尊師ポウパー・ソーラハン (Poppa Sawrahan) が即位したからである。彼は、学識深く、容色美しく、信仰心と徳に満ち、王の務めを守り、民を我が子のように愛したが、精霊マハーギーリは、姿を現わす、御告げを下さなかった。というも、王が正系の王統のもでなかったからであり、そこで王は、怖れて逃げ気狂いを装って乞食となっていた先王の子を召し出し、娘と結婚させ、後嗣としたという。ともかく王位は再びピューソーティの王統に戻り、以下四代続くが、またまた中断する。

## (ii) 二人の馬丁王

篡奪者として登場するのは、金持ちの下男をしていた村人ミンチュエ (Myinkywe) である。彼は、母が農園の世話で残され、羅刹鬼と交わって生んだ子という。彼は、女主人にいわれ世話していた馬を見失い、怖れて、王の下に出仕した。屈強な彼は、王の厩舎の馬丁頭となり、馬好きの王が昼に厩舎に来るため、お供で来る妃と示し合わし、森に狩に出て臣下とはぐれた王を弑した。彼は、王の着衣をまとい、馬に乗って町へ戻り、宮廷に着いて、言うことを聞かない妃の一人を殺したという。他の者は彼の命令に従い、大臣達も国が混乱に陥るのを恐れ、彼の言うままにしたと伝わる。

この大逆の王も息子が無かったため、大臣達が王族の者を探し出し、王とし、三度、正系の王統がつながる。以下四代目の王が狩猟中に落馬し棘に刺され横死したことや、九代目の王の時にバガンの町などの建設されたことが記されている。そして次の十代目の王は、馬好きで馬術に長じていたが、夜、厩舎で馬を見ていた時に殺されたという。その逆賊は、八代前に兄と戦ってサレー (Sale) に隠れ住んだ者の孫ンガクウェ (Ngakhwe) であるが、話しは次のようである [PE MAUNG TIN and LUCE 1923:

56-57]。

……その両親は、ある富豪の家に彼を連れて行き売った。ところで、ソガクゥエは、菫醬の花、蜜蠟、軟膏、香りの良い粉にひかれ、綺麗な衣装と美味しい食べ物を好み、そして必ず日に三度髪を梳ったという。

ある日、主人の金持ちは、彼を船に乗せ漕いで行かせた。バガンに着く前の晩、彼は夢を見たが、何と！ 彼の腸が臍から出て、バガンの町を取り囲んだ。早朝彼が船を川上へ漕ぐために来て、棹さすと、宝石を鑲めた盆に当たり、それが棹について上って来た。それを見て、ソガクゥエは、「俺の夢は確かに実現しそうもない。宝石を鑲めた盆で満足せねばならぬものか」と言い、それを川に突き戻した。

そうして彼は、バガンに来て、王の尊師でもある顧問官の家に行った。その時姿羅門<sup>ゾラマン</sup>は外出中のため、彼はその妻の女姿羅門<sup>ゾラマニ</sup>に話を述べたが、彼女は、「あなたは栄え偉くなるでしょう。長生きなさい」と言うだけであった。ソガクゥエは、彼女が夢解きの骨を折ってくれないのがわかると、引き下がり去って行った。そこに姿羅門が来て、妻に「私の去った後、誰が来たのか」と尋ね、妻が「一人の若い男が来て夢を喋り、私がかくかく解きましたよ」と答えた。夫の姿羅門は、その夢を聞くと、妻の鬘を切って投げ落とした。彼が投げたのと同じ瞬間、雷光がその鬘を打った。そこで姿羅門は直ちに、夢を告げた若者の後を追ひ、呼びかけ、彼をつかまえると、「貴殿はどこに住んでおられるのだ。其の方はどの一族の者かな。貴殿の見た夢は確かに実現しそうもなからう。信心に励みなされ！ ほどなく其の方はバガン王国の支配者となられよう。貴殿が王になった時、儂のことを忘れるでないぞ。」

ソガクゥエは売り買いをして、サレーの家に戻って行った。主人の金持ちは、ソガクゥエに辛く当たり、彼を激しく使った。ソガクゥエはもはやそれに堪えられず、タンネッ(Tannek)王のもとに仕えた。王は、若者の姿形を見て同情し、彼を厩舎の馬丁に命じた。ところで王は、若い側室と一緒に毎日厩舎に出むいていたが、この馬丁を呼んで、「馬丁よ、馬糞を向こうの方の穴に入れ、乾いたところで火をつけよ。すると、後で入れた糞も火熱で乾き、焼失してしまうぞ」と言った。そこで彼は、王の言った通りにした。ある日、馬丁と若い側室が示し合わり、彼が王を糞溜めの穴に押し落とした。そして彼は、妃や側室を脅かし、彼の命ずるようにさせ、王となった。

ソガクゥエは、かつて世尊を陽射しから三度葉で遮ったという、山の守護鬼であり、この土地で三度王になるとの予言を受けていた。それゆえ、彼は、勢威と力が大きく、羅刹鬼の国から転生したため、殊の外、怒りっぽく傲慢で、太って大食漢であった。大臣達や従者達はひどく怯え、彼に仕えた。彼は、自分を苛酷に扱った。サレーの主人に怒りを抱き、王になると、この者を虐殺した。王は、元の主人に似た者を捕えるといつも、その者を池に投げ入れ、豚と呼びながら、象の背から槍を投げて刺し殺した。しかし、王がこれ

を頻繁に行なった時、大臣達と従者達は象使いに莫大な賄賂を与え、象使いは、王が池水の中で狩りをしている時に、下で網を切った。そのため鞍かごは滑り、王と鞍かごが水に落ちた。大臣達と従者達は、各人手一杯の泥を投げ、王は死んだ。その池は今日までニュンタレップェック (Nyuntalephpek) として知られる。

(iii) 農夫王からアノーヤター王へ

ンガクゥエ王の後を継いだ息子も、森で狩猟中、飢えから胡瓜をこっそりとつまみ食いしたところ、農夫から鋤の柄で打たれ死ぬという最期を遂げる。次に王となるのが、当の農夫ニャウンウー・ソーラハン (Nyaung-u Sawrahan) である。

王の馬丁は、王殺しの嫌疑のかかる危険を察し、「王を弑した者が王となる」などと言って、かの農夫を説得し、王宮に連れ戻り、王妃に知らせた。国の混乱を怖れた王妃は、農夫を入浴させ、汚れや患部を擦り落とし、七日目の朝、百官に会わせ拝礼させた。これらの時、彼を蔑む言を弄した若い側室やある大臣は、扉の石像により脇で毆殺され、人々は自らの肉を食われるかのように怯えたという。元農夫であった王は、彼の胡瓜畑に広大で心地の良い農園を作り、大きなナーガ像を鑄造して崇拜し、次第に蔓延しつつあった異端のアリ (Ari) 僧の教説を守った。そして、帝釈天がチャウンビュー (Kyaungbyu) 王を立てて来たのに立ち向かった時、彼の前世の善行による強力な業<sup>カルマ</sup>が尽き、扉の石像に突き落とされ死んだという。

チャウンビュー王は、三代前のタンネッ王の妃の一人が、身籠ったまま隠れ住み、生んだ子で、母から亡き父のことを聞き、父のようになることを誓い、また母の作ってくれた弁当のお初をサウンジャン (saunggyan) の木に上げていたところ、木の精霊が現われ、王となることを予言したという。そして、未来の王がパガンの地に出現すると人々が騒いでいる時、彼も、王に会おうと急ぐ途中、老人に身をやつした帝釈天に会い、その乗っている馬と、紅玉製の髪留め、紅玉製の腕輪、槍と剣を譲られる。これらを身につけ馬を走らせると、「新しく昇る日の御子のように」、これらの飾りとともに光を放したため、百官も人々も彼を拝礼した。彼は、宮殿に乗り入れ、自らが新しい王と覚えるに至ったという。

王は、前王が妃にたてた王女の三姉妹を、自らも王妃とし、末の妹との間に、アノーヤターミンソー (Anawyahtaminsaw) をもうける。しかし、姉二人の生んだ、前王の息子達は、成人すると、義父の王を僧院に誘い込み、捕えて脅し、剃髪させたという。王位は、まず兄の方に行くが、彼は狩猟中に鹿と誤って射殺され、弟が後を継ぐ。アノーヤターは、彼の生母を義兄の王が望んでいるのを知って怒り、父に請い、帝釈

天の与えた槍，剣，紅玉の腕輪と髪留めを貰い，その馬を腕輪の力で捕え，ポウパー山に軍勢を集め，パガンに向け進んだ。そして，王である義兄と，馬上で槍の一騎打ちを行ない，彼を刺し貫き，王は，馬もろとも川へ行って没したと伝わる。

アノーヤターは，僧院の父を復位させようとするが，老齡ゆえに断われ，そこで王の什器や王権の五つの象徴物を父に配し，父を法皇とした。この法皇は，四年後に崩じるが，その記事をもって年代記の第三巻が閉じられる。ビルマ最初の強大な統一王権をうちたてたアノーヤター王については，その遠征，宗教改革などの事蹟，輝かしい勢威などが，続く第四巻の最初の幾章かを占めている。第三巻のアノーヤター王の章の大部分は，彼の息子で，やはり強力な王となるチャンジッターの誕生と，若い頃の手柄についての話である。

(iv) 王に追われた王子

チャンジッターの母は，「中つ国」(インド)のヴェサリ(Vessali)王国で，王女の比丘尼の植えた木の実から生まれた娘と，王子との間に生まれた王女で，アノーヤターの求めに応じ，パガンへと送られた。途中使節は，彼女の美しさに自制できず彼女と情を交わし，ために発覚を恐れ，彼女に扈従して来た者達を，道々の町や村に残して行き，王に，一人の供の者も持たない彼女はヴェサリ王の本当の王女でないと誣告した。王は，これを信じて怒り，王女をパイェインマ(Payeimma)の大臣のもとに預けたという。王女がパイェインマの地に着き，アノーヤターの子が生まれようとした時，大地震が起こった。王は，彼の呪者達にわけを問うたところ，北の方で王者になる者が宿っていると言われ，その方面の妊婦七千人以上を殺し，おなかの者が生まれたと聞かされ，乳呑み児を六千人以上殺し，なお彼が成長していると答えられ，村童五千人以上を殺した。この王の探索の度に，チャンジッターは，あるナーガの若者によって隠され逃れたと言われる。

さてチャンジッターの母親は，息子を，王の導師に預け，彼は僧となった。かの白呪術も黒呪術も長じた呪者達はなおも，「彼は僧になりましたぞ！」と語った。王が彼らに，「このことをどのように知ろうか」と尋ねると，彼らは，「僧達を食事に招き，終った時に，壺で水を差し上げるのです。すると！ 王となる者の口から法輪が輝いて現われ出ます。」そこで王は，教団の僧全てを招き，毎日食事を施し与えた。ある日，チャンジッターに食事を施し与え，食事が終って，やがて彼に壺の飲み水を差し上げた。すると何と！ チャンジッターの口から法輪が輝いて現われ出て，王はそれを見て仰天し，壺は後ろへ倒れた。



王は、彼に懇願するように、「おまえが僕の王座を盗むというのか」と叫んだ。そこで、白呪術にも黒呪術にも長けた呪者達は、王の耳に、「この者は、御身の二代後に王となりましよう」と語りかけた。王は、「おまえ達は、たった今、このことを僕に告げたのだ。ああ！僕は、この者が僕の王座を奪うと思って、たくさんの命を奪った！」と言った。王は、チャンジッターを遷俗させ、御前に出仕させた。そして、自らの子であることで憐れに思い、彼をチャンジッターと名づけ呼んだ [PE MAUNG TIN and LUCE 1923: 68-69]。

その後、決められた時間のうちに、千本の椰子の木に登って実を伐ってくるという者、六十頭の牛の軛を引いて、きちんと畑を耕せるという者、イラワジ川の崖から駆け下り、対岸との間を泳いで往復し、また崖へ駆け上れるという者——彼らを、王はチャンジッターのもとに送り、その部下とした。チャンジッターとこれらの者達は、四頭の神馬を、仕つらえた水の中に落とし捕えるという手柄をたてたという。

### 3. 建国神話の構造と意味

ビルマの王統譜は、年代記に従えば、アノーヤター王に至るまで、三王朝、百十四代に及ぶ。年数は、年号の記されている<sup>11)</sup> タガウン王朝の末期から、アノーヤターの父王の崩御まででも千五百有余年にわたる。しかし、大部分は、一章で述べたように、後世の虚構であるが、逆にそれゆえ、王統譜の構成は極めて図式的である。

三代の王朝は、いずれも一系でつながっていない。タガウン朝は、二次にわたる。インドからのシャカ族王党の移住が語られ、それぞれ三十三代、十七代の王を数える。次のタイエーケッター朝も、ドワッタバウン王から数えて九代と、鶏頭を食べて王となったンガタバ王からの十六代に分かれる。パガン朝は、その王統がしばしば正系の王族でない者により中断されており、ピューソーティ王の恩人の行者から始まる八代、二大臣に篡奪された後の九代、尊師ポウパー・ソーラハン王の後の四代、村人ミンチュエ王の後の十二代、農夫ニャウンウー・ソーラハン王以後と、五次に分かれる。

ここで明らかのように、それぞれ王朝の各次の代数は、四の倍数、または倍数プラス一である。四は四方を意味し、加える一は中心を表わし、四（の倍数）プラス一は、全体を表象する聖数である<sup>12)</sup>。恐らく、これらの数を重ねていくことで、王統の伝統

11) タガウン朝の後継者により大猪の仕留められた時に年号が仏暦で記されており、西暦になおすと紀元前504年にあたる。

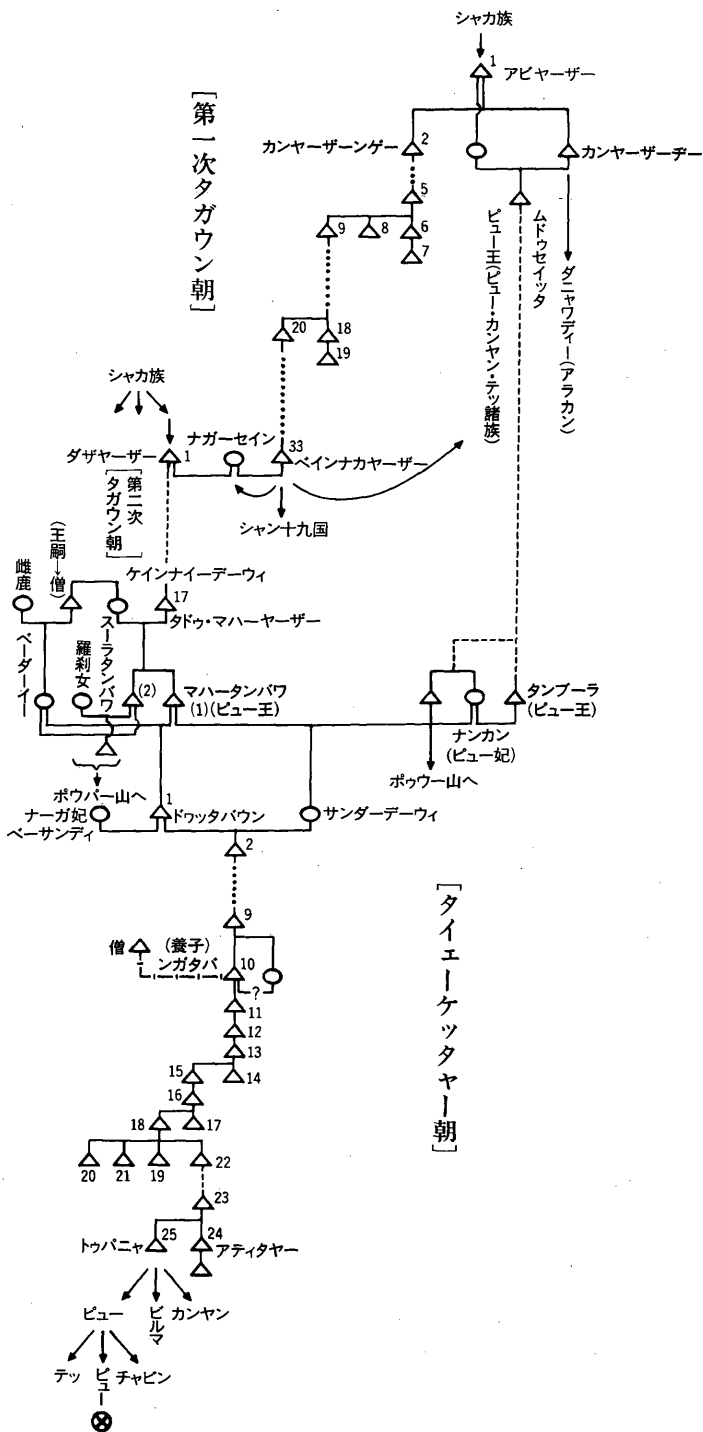
12) 四方によって宇宙（＝世界）全体と表わす観念については、ハイネ＝ゲルデルン1975など参照。

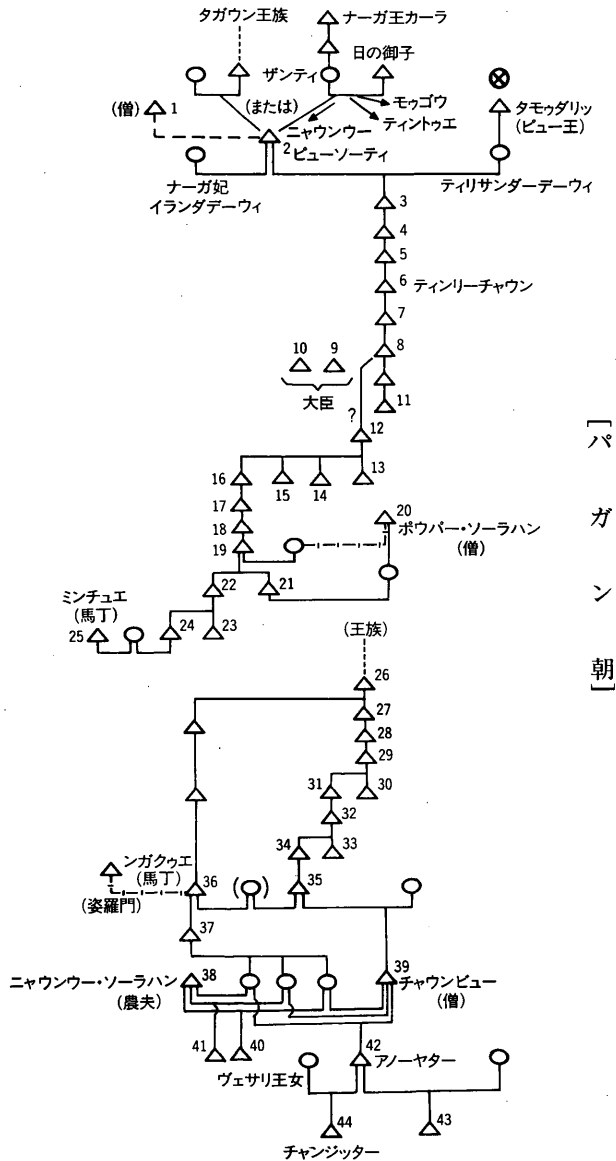
の長さを示し、歴史が釈尊の在世時、さらにはそれ以前にまで遡る形にしたものであろう。このことは百十四人の王は、王名こそ記されるものの、またタイェーケッタヤー朝以降の各王には、系譜・在位年数・寿命・崩御時の異変・誕生の曜日が述べられるが、これ以外の事蹟や伝承の限られていることから知られる。王朝の始まりと終わり、途中の篡奪者についての話を除くと、バガン朝では第二章で述べたぐらいしかなく、タガウン朝の各王の記事は皆無である。タイェーケッタヤー朝については、第二章にあげた話の他、九人の王に関し、善悪いずれにしろ性格・事跡にふれるが、例えば善王は宗教を守り臣民を我が子のように慈しんだというふうに書かれるのみで、具体性に乏しい。

### 3.1. 開闢王の伝承

長大な王統譜を貫くイデオロギーは、ビルマの王統が、インドのシャカ族に出自を示し、仏教を基盤とする王権に正統性を与える点にある。シャカ族の王統は「太陽の王朝」とされ、それゆえビルマの王統も「太陽の王朝」の末裔とされるが、このことが単なる隠喩的表現でないことは、バガン朝を創始したピューソーティ王の誕生説話から知られる。年代記では異説とされているものであるが、類似の話は、ジャン・バラウン・哀牢・カンボジア・ジャワにもあり [松本 1978: 313-364 など]、日の御子と龍女の婚姻の神話は、ビルマで流布していたのであろう。このことを含め、ピューソーティ王に関わる伝承の要素を例挙してみる。

- (a) 「日の御子」(「太陽の王朝」=タガウン王統)の血をひく。
- (b) 「日の御子」とナーガとの婚姻から生まれる(正伝では、ナーガより授けられ、またナーガ王夫婦が我が子のように可愛いがたとある)。
- (c) 捨て子である(正伝では、行者に預けられる。または流浪してバガンの老夫婦のもとで養われる)。
- (d) 俗界から離れた者より将来を予言される。
- (e) 流浪する(下流の方へ)。
- (f) 超自然的武器(父の「日の御子」または帝釈天から)をとる。
- (g) 敵の怪獣を退治する。
- (h) 王(ピュー王)の娘と結婚し、継嗣となる。
- (i) 即位にあたって、帝釈天とナーガから、神器や神象、神馬、従者を与えられる。
- (j) ナーガの王女も王妃とする。





「バ  
ガ  
ン  
朝」

図1 ビルマの王統譜

(k) しかし、彼の継嗣は、ピュー王の王女との間の子である。

ピューソーティ王の説話に見られる、こうした要素は、タイエケッタヤー朝の始まりの一連の物語にも共通する。ここでは先の要素が、盲目の兄弟（および彼らの叔父）、次のドワッタパウン王にまたがって見られる。

- (a) 彼らはタガウンの王統である（叔父は違うが、王となっていない）。
- (b) 後述の伝承（タガウンの守護霊）では双子の母が龍と交わり、龍の息で兄弟が盲目になったという。またドワッタバウンの母は、異界のもの（鹿）から生まれ、川岸で兄弟に会うように、水界と縁がある。
- (c) 双子の兄弟は流される（叔父も、自らの意志ながら故郷へ戻らない）。
- (d) 叔父の行者が兄弟の素姓を知る。
- (e) 叔父、兄弟ともタガウンから下流へとやって来る。
- (f) 叔父、兄弟とも「五つの武器」をとる。
- (g) 叔父は大猪を退治する（この大猪退治の話は、ビューソーティのものとの説がある）。

また兄弟は、羅刹女を降参させる（彼らの上陸地点が「鶴の飛ぶ所」であるのは、鳥との関係があるかもしれない）。

- (h) 双子の兄は叔父の娘と結婚し、この叔父が薦めて、彼をビューの王に即ける。兄は、ビュー王妃とも結婚する。兄の死後、即位した弟も、叔父の娘すなわち兄王の妃と結婚する。さらにドワッタバウンは、ビュー王妃の娘と結婚する。
- (i) ドワッタバウン王は、帝釈天から神器を授かった。またナーガから贈られた船も言及されている。
- (j) ドワッタバウン王も、ナーガの王女をも王妃としている。また双子の兄はビュー王妃と雌鹿の娘（＝叔父の娘）を、弟は後者と羅刹女を王妃とする。雌鹿の娘も羅刹女も、ともに異界の女で、水辺に出てくる。
- (k) ドワッタバウン王の母は雌鹿の娘の方であるが、彼がビュー王妃の娘との間にもうけた子の末裔が、以降の王統を継ぐ。

さらに先立つタガウン朝の始まりにも、同様の要素が見られるであろうか。多少なりとも具体的で比べられるのは、第二次のダザヤーザー王の伝承である。

- (a) 「太陽の王朝」（シャカ族）の王族である。
- (c) 敵に攻められ故郷を離れる。
- (e) 移動して、度々拠点を移している（「中つ国」から出発しているゆえ、下方への移動と考えられるかもしれない）。
- (h) 第一次タガウン朝最後の王の王妃と結婚する。その後、第二次タガウン王朝を開く。
- (j) 王は二人の王妃を持つとされる。しかし今一人の王妃の名・出自は明らかで

ない。他方、先王の王妃の名はナガーセインであり、ナーガ（ナガー）出自の王妃の可能性が考えられる。

- (k) ナガーセイン妃との間の息子は王統を継がなかったようである（少なくとも名前が一致しない）。

神器などの授受 (i) は、精霊からの太鼓が語られ、宮殿の上半分がナーガや諸霊の手で建てられたとある。後者の点はタイエーケッターの城市がナーガと帝釈天によって建設されたことに似通い、またドワッタバウン、ピューソーティと同じように帝釈天などに導かれ即位したと記される<sup>13)</sup>。あるいは治世中に宝石の雨が降った記事も他の王朝創始者に共通する<sup>14)</sup>。しかし、タガウン朝創設者の伝承には出生、僧などの介在、難敵退治といった重要な要素が欠けており、不完全でしかない。

これよりむしろ興味深いのは、年代記のこの巻の棹尾を飾るアノーヤター王、およびその父チャウンビュー王の物語である。

- (a) 両王は、バガン朝の正系、すなわち「日の御子」の末裔である。  
(b) チャウンビューの父はバガン朝の正系の王である。他方、その母が隠れ住み、彼を生んだ場所は、ナーガの土地への入り口でナガーチャウンと呼ばれる。  
(c) チャウンビューが生まれた時、既に父は亡くなっていた。またアノーヤターの父王は、位を追われ、出家の身であった。  
(d) チャウンビュー王自身が僧であり、アノーヤターの厥起にあたり、武器を与える。

—またチャウンビューについては、木の精霊の予言がある。

- (e) チャウンビューの母は、彼をおなかに入れて逃げ、母子は後に蒟醬御料地での仕事のため移り住む。

またチャウンビューの時、未来の王に会うべく人々がトゥーユウイン山へ行ったとあるが、アノーヤターも、ポウパー山で軍を集め、バガンへ向ったという。山から（下へ）の移動とも考えられる。

- (f) 両王とも、帝釈天からの馬・武器などを手にする。  
(g) いずれも王位篡奪者を滅ぼす。  
(h) チャウンビュー王は、篡奪者である先王の王妃（先に篡奪された正系の王の王女三姉妹）を王妃にたてる<sup>15)</sup>。なおアノーヤター王の第一王妃の出自は言

13) この三王のみである。

14) 他にティリピッサヤーの町を建設したンガタバ王の記事にある。

15) アノーヤター王の母が三姉妹のうちの誰かは明らかでない。

及されていない。

- (i) 即位前であるが、帝釈天から王威を示すものを与えられる (f と同じ) <sup>16)</sup>。
- (j) アノーヤター王は、第一王妃と別に、異国のヴェサリ王国の王女を貰い受ける。その子は、後にナーガの若者の庇護を受け、またナーガの子とする説もある。
- (k) 異国の王女の子チャンジッターは後に叛徒を倒し王となるが、アノーヤターの正統の後継者は、第一王妃の王女である。

以上のように見てくると、チャウンビュー王（およびアノーヤター王）の伝承は、これらの王が開闢王の性格を持つことを示している。面白いことに、チャウンビュー王は百十五才まで生きるが、百才以上の寿命の王は他に、百五才のドワッタバウン王、百十才のビューソーティ王などパガン朝最初の三代の王である。この点も、新たな王朝の始まりを示唆しているかもしれない。

それはともかく、王朝創設者の伝承の要素は、一部の弱い形で、他の王にも見られる。これらはいずれも、王統の中断を継ぐ所に位置する者達である。例えば、ンガタバ王は、僧に預けられ (c)、怪鳥を料理して食べ (g)、王となることを師僧に予見され (d)、僧、大臣、王のもとを移り (e?)、(王の娘と結婚し) 継嗣となる (h) <sup>17)</sup>。ンガクゥエ王は、王族の末裔であり (a)、両親に売られ (c)、娑羅門に将来を予見され (d)、サレーとパガンの間を行き来し (e)、王妃と語らい (h)、王を殺し、またかつての主人も屠る (g)。彼は羅刹鬼の転生というが、極めて似た伝承を持つミンチュエ王は羅刹鬼の種といい、異界の血をひく王であること (b?) をうかがわせる。さらに、一層開闢王の伝承に重なる要素を持つのは、チャンジッターの話である。彼は、パガンの正系の王の子であり (a)、ナーガの庇護を受け、またはその子とも言われ (b)、父王より捨てられている (c)。彼は、王の呪術師に将来を予見され、また自ら僧となり素姓を明らかにされ (d)、王の追求を逃れ (e?)、後に、神馬を獲得し (f)、叛徒を破った (g)。叛徒のために一度中断した王統を再び始めた者であり、前王の王妃などを王妃にたてている (h, k)。

このように見てくると、ビルマの年代記は、王朝を開く英雄の物語をくり返し語っているようである。それは、日の御子と龍女との間の子が、捨てられ、流浪し、超自然武器を得て、勲功をあげ、王族の女と結婚し、王統を継ぐというものであり、さら

16) チャンジッターの馬は、水界と縁が深くビューソーティ王の手にした川から出現した馬を思い起こさせる。

17) 先に述べたように宝石の雨が降り、また帝釈天やバゴダ建設のことが、この王に関する記事にある。

に聖職者の助け（または介在）、ナーガとの婚姻などの要素が加わる。それが、歴史上の人物であるアノーヤター王やチャンジッター王に関してまでも語られているのは、この伝承の根強さを示し、王統譜の伝えるものが奈辺にあるかを表わしている。この点は後に考察してみる。

### 3.2. 二つの流浪譚

タガウンの二次にわたる建国神話が、同様の話のくり返しであることは明らかである。婚姻における血筋の尊卑をめぐる争い、それにより没落し、移住して、新たな地で王朝を開くという筋である。面白いことに、第一次タガウン朝の話にある、建物造り競争と同じ話が、タイェーケッター朝の滅亡の後にも語られる。ここでは、三分され、そのうちの二つの分枝が競い合うが、第一次タガウン朝の場合も、兄弟それぞれの系統に分かれるとともに、ヤカインに行った兄の子はビューの支配者となり、結果的に、来住者は三つの系統に分岐する。第二次タガウン朝でも、敗れたシャカ族は、三つの集団となった話加わっている。また、印度からの移住者は何ヶ所か流浪するが、タイェーケッター朝滅亡後のビュー民族も、拠点を移し、パガンの地での新たな王国の誕生へと続く。このように見ると、タガウン建国と同じテーマが、タイェーケッター朝とパガン朝をつなぐところくり返されている。

ところで、第一次タガウン朝が外敵より滅び三分したとあるのに対し、第二次タガウン朝の終末は明らかでない。ともかく王嗣が流浪し、隠者となり、生まれた娘との近親相姦の誤解を避けたと話が続く。この点で興味深いのは、タガウンの町の守護霊の伝承である<sup>18)</sup>。すなわち、宮殿の柱飾りから出現した龍が、人間の姿をとり、王妃の寵愛を受け、その毒牙で王を殺す。続いて王となり王妃を娶った七人の弟達も殺され、困った大臣達が王を探す車を送り出す。幼い頃に森で迷い、見知らぬ人に育てられた、王妃の息子が、その車に出会い、王となり、実の母を知らずに妻とする。彼は首尾よく龍を退治するが、その後生まれた二王子は、胎内で龍の息にあたったため盲目となり、筏で流されたという。

この伝承の結末は、タイェーケッター朝の王統の祖となる双子の兄弟の盲目のわけを説明するが、注目されるのは実の母子の結婚のことである。この伝承を補うとすると、タイェーケッター朝の物語は、母子相姦に始まり、流浪し、隠者に出会い、王権を手にするとなり、ちょうど第二次タガウン朝の話と対称をなす。そしてタガウン朝の始まりにある、没落・三分裂・建物造り競争・移住は、タイェーケッター朝の

18) この伝承については、田村 [1987] が紹介してある。



〔第一次タガウン朝〕

滅亡 → 移住 → 建物造り競争 → (三分) → 王権 → 滅亡・三分

〔第二次タガウン朝〕

滅亡・三分 → 移住 → (結婚・宮殿建設) → 王権 → 流浪 → 父婚相姦(?)

〔タイェーケッタヤー朝〕

母子相姦(?) → 流浪 → (結婚) → 王権 → 滅亡・三分 → 建物造り競争 → 移住

図2 三王朝の物語の展開

終わりでくり返されている(図参照)。

タガウン朝からタイェーケッタヤー両朝を結ぶ間に展開する流浪譚を、さらに詳しく検討してみよう。ここに見られる二つの流浪譚、すなわち行者となる叔父と、盲目の兄弟のそれぞれの物語は、まさに裏返しの関係になっており、先のタガウンの守護霊伝承の母子相姦のモチーフを補うと、このことが一層明らかである(図参照)<sup>19)</sup>。まず叔父の話から順を追うと――

- I (1) 王の後継者となる。
- (2) 王命とはいえ、自らの意志で故郷を離れ流浪する。
- (3) 森・山から川へ入る。五つの武器を手に入れている。
- (4) 猪退治の勲功をとげる。
- (5) 行者となり、超自然力を身につける。
- (6) 雌鹿が来て、尿を嘗める。
- (7) 雌鹿から女の子が誕生する。雌鹿は逃げ去る。
- (8) 父の行者の指からでる乳で、女の子は育つ。
- (9) 行者は、娘と共にいることを隠そうとするが、一緒に住んでいる。
- (10) 穴のない瓢を用いることで、父娘相姦の恐れを避ける。

これに対し、双子の話は次のような順である(番号はIでのモチーフと対応するよりに付けてある)。

- II (10) 母子相姦があり、生まれてきた双子は盲目である。
- (9) 王妃は、息子達を隠そうとするが、結局、王命により捨てる((2)兄弟

19) このような異郷訪問譚の構造分析については、大林 [1984]。

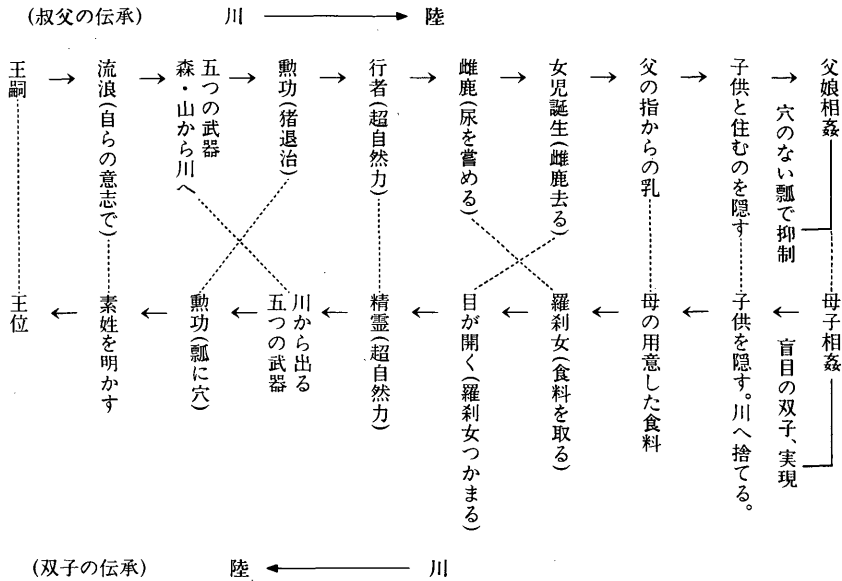


図3 二つの流浪譚

の流浪)。

- (8) 母の王妃の用意した食料で、兄弟は生き延びる。
- (6) 羅刹女が来て、食料の一部を横取りする。
- (7) 羅刹女はつかまる。羅刹女の手で兄弟の目が開く。
- (5) 精霊のもたらした薬により目が治癒する。
- (3) 兄弟は川から出る。五つの武器を手に行っている。
- (4) 勳功をとげる。瓢に穴をあけ使えるようにしたことである。
- (2) 自らの素姓を明かし、叔父と出会う ((9) 娘と行者の庵に行く)。
- (1) 王となる。

以上のように (I) と (II) の二つの流浪譚は、物語が逆の順序で構成され、その要素は対照を示している。両者が一連のものとされる場合、前半 (I) と後半 (II) との転回点は近親相姦であり、(I) では避けられるのに、(II) では実現される。この時、近親相姦は父娘相姦と母子相姦という対照的な形をとっている。そして、穴のない瓢と盲目の子供は象徴的意味を同じくすると考えられるが、前者が近親相姦の抑制の原因であるのに対し、後者はその実現の結果となっており、前者が男性の手により、後者は女性の助けで開けられる。また (I) (II) とともに舞台が、勳功を境に川から陸 (行者の庵の場所) へと移るが、対応する要素の場は逆となる。

このように前後半で裏返しの関係の構造を持つ流浪譚は何を伝えようとしているのであろうか。注目されるのは双子の兄弟のあげる勲功である。それは武勲でなく、瓢を使用できるようにするといった文化的なものである。また、彼らと行者の娘との結婚は交差イトコ婚であり、これ以前の第二次タガウン朝の王子王女達が兄弟姉妹で互いに通婚をした点と異なる。そして話の転回点が近親相姦にあることからして、この物語は、近親相姦の忌避（あるいは禁止）、ひいては自然の状態から文化への転換を語っている可能性が考えられる。少し後のこととなるが、タイエーケッタヤー朝の猿になった王の話は、以後の近親相姦の企てが当人を自然の状態に引き戻し、人間社会から放逐される結果となることを能く語ってくれる。

さらに、タイエーケッタヤー朝に先立つ伝承で興味深いのは、ここでの仏陀の予言である。それは、大洋に漂うもの——流れ島から大地が創造されたという神話を思い起こさせる——、大地の蠢動を語り、地勢の変動を述べるように、世界創造の神話的内容を持つ。そして、この後に出てくるパガンの予言は、人間社会のあり方を告げるものである。

ビルマの年代記は、王統譜を中心に構成されたものであるが、そこに見られる諸伝承は、神話的な意味内容を潜ませている。タイエーケッタヤーの始まりにおいて、世界の創造が語られ、続く伝承で、自然から文化への移行——敷衍して、人間社会の起源——が示され、パガンでは、人間社会の構成を述べ、王朝を開く英雄の神話へと移っていく。ただし開闢王の話は、年代記の中心的なイデオロギーが王権の正統性を示すところにある以上、くり返されるテーマでもある。他方、タイエーケッタヤー朝の前には、先の流浪譚の裏返しの関係をそのまま延長したように、タイエーケッタヤー朝の伝承を逆転させた形でタガウン朝の伝承が付加されているといえよう。

### 3.3. 三領域と王権

年代記の中のタガウンはビルマ王統の発祥の地であるが、これは、インドからの来住者が至ったことに由っている。インドは、王統のみならず、それを支える宗教も発した神聖な地であり、「中つ国」と言われるように、世界観の中心にある。同時に、そのシャカ族王朝が「太陽の王朝」と呼ばれるのは、「中つ国」が象徴的に天と結びついていることを推測させる。とすると、インドと直接の関係を持ち、やはりその王朝を「太陽の王朝」というタガウンも、神話的観念の上で、天を意味するかもしれない。

このことは、ビルマの王権が天に淵源するとの観念と関わりをもってこよう。その

具体的表われは、パガン朝でのポウパー山の重要性であり、代々の王は即位時に登り、精霊マハーギーリを祀ったと伝わる。この精霊は、非正系のポウパー・ソーラハン王に対し出現しなかったように、王権の正統性を示す機能を持つと考えられ、年代記の以後の伝承でも王権の危機にあたって登場する。アノヤターが最初にポウパー山に兵を集めたのも、この脈略で理解されよう。そして、ポウパー山のマハーギーリがタガウン出身であることを思いあわせると、ポウパー山とタガウンが密接に関わり、両者は象徴的な意味の上で強く天に結びついているといえる。なお、王朝を開く者などがタガウンから下流へと来るのは、天からの降下を示唆しているかもしれない。また、タイェーケッタヤー朝の前に加えられたタガウン朝の伝承は、地上の世界や人間社会の始まりに先立つ、天界での出来事として、神話上位置づけることもできよう。

王統譜を見て面白いのは、ピュー民族が王朝間をつなぐところに位置している点である。タイェーケッタヤー朝は、タガウンの王族である双子の兄が、ピュー民族の王となり、ピュー妃と結婚することから始まる。ピューソーティも、ピュー民族の王の娘と結婚して、パガン朝への道を開く。このピュー民族は、タイェーケッタヤー王国が二度分裂してできたもので、先のピュー王妃もタガウン・シャカ族の一族とわざわざ記され、いずれも伝承上はタガウンの王統の流れをひいている。しかし、歴史的事実と符合することであるが、ピュー民族自体は、既に第一次タガウン朝の発端時に、先住民集団として出てきている。こうしたピュー民族の主権の上に常に新しい王朝が築かれることは、先住者との結びつきを開闢王の条件とする観念が背景にあると考えられる。それは、先のタガウンの天に対して、いわば地を意味するものとのつながりである。

王朝の開闢者が結びつくのは今一つある。ナーガ、すなわち異界の者である。既に開闢王の伝承の分析で示したように、王がその血をひき（伝承の要素 b）、またその女と結婚する（同 j）。龍蛇であるナーガは、いうまでもなく水界と縁が深いが、大地とも関わるようである。タイェーケッタヤーの城市建設にあたり、帝釈天が真ん中に立ち、ナーガのひく綱で敷地を定めたとの伝えや、ピューソーティ王の誕生の時に出てくるナーガの穴のことは、それをうかがわせる<sup>20)</sup>。またドワッタバウン王が最後にナーガの国へ連れ去られたという伝承は、ナーガが冥界とも関わる可能性を考えさ

20) ナーガと大地との関わりについては、今日も次のような民間の伝承がある。すなわち、大地に棲むナーガが、四ヶ月ずつ順々に、東→南→西→北と頭を動かすので、その頭にあたる部分の方角から尻尾の方へ引越しなどで動くのは忌避される。これをナーガ・フレ (naga-hle) という。フレは、「まわる」意味である。筆者が1979-80年に調査したサガイン近郊の村人の語るところである。

せる。

このように見ると、王朝創設者は、天とともに、水界あるいは（および）大地（地下）という宇宙の二大領域とつながりを持ち、さらに地上の先行の王権と結びつくという構図が出てくる。それゆえ、王の即位時には、帝釈天とナーガが祝福し、レガリアなどを与える。また、タイェーケッターの予言に先立ち仏陀が、山頂と川辺の岩に仏足石を印したとの伝承は、あらためて宇宙の二分界を示している。

### 3.4. 女性・王権・仏教

ビルマの年代記は、王統がタガウン朝、ひいてはジャカ族に由来し、一系につながることを示そうとする。しかし、それはしばしば、篡奪者、あるいは英雄によって中断させられる。この時、新しい王は、先の王の妃または王女と関係を持つことで、先行の王統につながっていく。王朝間は、前述のように、プューの女性が媒介となり、二つのタガウン朝の間も王妃ナガーセインで結ばれている。パガン朝の農夫王ニャウンウー・ソーラハンは先王の王女三姉妹を娶り、彼を追いつ落としたチャウンビュー王も彼女達を王妃にたて、また鶏頭を食べ王となる、タイェーケッター朝のソガタバ王も、先王の娘と結婚したという。このことは、逆に言えば、女性が、外来者と結ぶ位置にあり、王統の断絶を導く潜在的な危険性を持つことを示唆する。それをよく表わすのは、馬丁から王になった、パガン朝の二王であり、王妃の尊師であったポウパー・ソーラハン王もこの例であろう。女性は、言うまでもなく、王嗣を生むことで王統の連続性をもたらす位置にある。それと同時に、ここで述べたように、王統を断つ存在とも表わされる。

この女性の両義的な意味は、恐らく、ビルマの王権についての二つの相対立する観念の表われであろう。一つは、王権が正系の血統によって受け継がれていくというものであり、他方は、王権が篡奪者あるいは英雄によって創出されるとの観念である。そして、後者の観念に関連して、農夫のニャウンウー・ソーラハンが言われたように、拭逆者自身が王になるとの考えや、また、彼の場合と馬丁出身の二王の例の示すように、王宮を掌握した者が王になるとの考えがうかがえる。実際に、歴史的に見てビルマの王権は、篡奪と王朝交替で続いている。しかし、年代記は、インドのジャカ族起源の輝かしい一系の王統を示そうとする。この矛盾は、また以下のような形でも明らかにされ、かつ一定の「解決」が示されている。

問題は、王朝創設者の伝承における、二人の王妃の運命である（伝承の要素（j）（k））。開闢王と結婚する、先の王族の女は、王統を継ぐ者を生むが、ナーガ王女な

ど、いわば異界から来た王妃はそうでない。ドゥッタバウン王のナーガ妃は、王の額の恙が消えると王のもとを去り、その叔父の王妃の羅刹女は、夫が兄王の妃を娶ったのを嘆き、息子とともにポウバー山に移り住んだという。ピューソーティ王のナーガ妃に子はなく、アノヤーター王に異国から嫁いで来た王女は、王使の讒言のために王宮から追われる。このように異界からの女性との結婚は、概ね不幸な結末となり、新しい王統を生まない。それは、次のようなことを意味していよう。すなわち、王統は、外からの英雄（または篡奪者）の手に一旦帰するが、外（異界）の女性ではなく、内（王族）の女性を媒介して、再び正系に伝わっていく（図参照）。これによって、王統をめぐる正系と異端、内と外、ひいては王権について対立する観念に、一定の「妥協」がなされ、「解決」がはかられている。

ところで、正系でない者が王位に即くのは、前世の善行による業<sup>カルマ</sup>の結果であり、逆にこれが尽きると没落する。この点を明言しているのは、農夫だったチャウンウ・ソーラハン王の伝承である。その二代前のソガクゥエも前世の行ないのため王となったと述べられており、またドゥッタバウン王の最期は業<sup>カルマ</sup>の尽きたためと語られる。業<sup>カルマ</sup>は仏教の教えの根幹の一つであるが、こうした業<sup>カルマ</sup>に基づく王権の考え方の一方で、血筋による王権の観念が対立する【田村 1991参照】。しかし後者も、正系性の根拠を、釈尊を生んだシャカ族出自に求めており、いずれも仏教に王権の正統性の基盤を置くことに変わりはない。

仏教と王権は、ビルマの歴史の一貫したテーマである。それは、年代記において、開闢王の伝承での聖職者の介在のモチーフ（要素（d））として現われている。彼ら

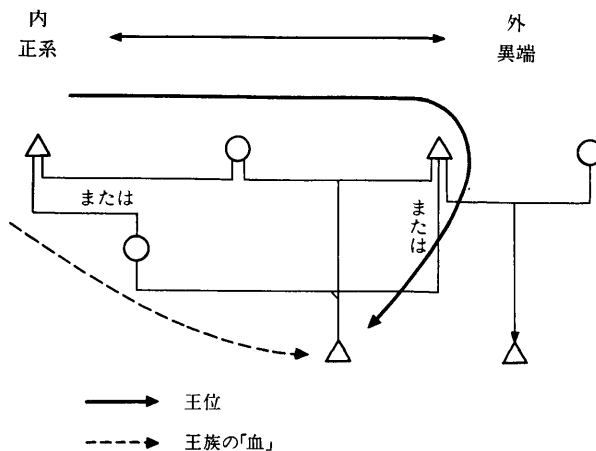


図4 王統の正系と異端の「解決」(妥協)

が、将来の王となる者を育て予言し、双子の叔父やアノーヤターの父など、具体的に即位への援助もするように、仏教は、王権を生み出す。換言すれば、王権は仏教の力によって打ち立てられる。それゆえ、ピューソーティ王に先立ち恩人の僧が位に即位するように、王朝の始まりに聖職者を置くことで、仏教の俗権への優越が示される。王統を復興したアノーヤター王も、まず父の法王に王権の徴を配している。

しかし、仏教は王権にとって両刃の剣である。王妃の尊師だったポウパー・ソーラハン王の例の示すように、聖僧者自身が王統を中断する存在ともなる、タイェーケッター朝のソガタバ王の師僧も、彼自身が鶏頭を食べ王になる野心を持っていた。実際に、王権の二つの観念からして、シャカ族出自の正系の王統は、強力な業<sup>カルマ</sup>を持つ者の存在によって潜在的に脅かされていることになるが、この業<sup>カルマ</sup>の考えは仏教に強く支持されているのである。他方で、業<sup>カルマ</sup>による王権も、自らの業<sup>カルマ</sup>の尽きる危険や、より強力な業<sup>カルマ</sup>を持つ者の脅威という矛盾を孕んでいる。

年代記の伝承で興味深いのは、タイェーケッター朝の終焉である。そこでは、有徳で敬虔な理想的な王が語られる。しかし、彼は余りにも仏教に熱心であったため、国の混乱と滅亡の結果をもたらす。同じ王朝の創設者ドワッタバウン王の没落も、聖権に属する物への僅かな不法からである。仏教は、王権を生み出すとともに、それを滅ぼす。ドワッタバウン王に聖人達が、蝮やコブラを喩えに言ったことは、こうした仏教の危険性を余すことなく語っている。

ビルマの年代記は、何よりも王権の正統性を示すことを目的とする。しかしそれはまた、世界創成から王朝の始まりに至る神話的内容を潜ませ、他方で、くり返される開闢王伝承の中に、王権のあり方や矛盾を伝える。そして、仏教と王権という、ビルマの歴史を貫き、そのダイナミズムも生み出してきた最大の命題を、あらためて示してもいるのである。

## 謝 辞

本論のテーマである神話の分析については、大林太良氏（東京大学名誉教授・東京女子大学教授）の学恩によることが大きい。ここに記して感謝の意をささげたい。

また本論につき懇親なコメントをいただいた田辺繁治氏（国立民族学博物館教授）にも感謝の意を表したい。土佐桂子氏（上智大学アジア文化研究所研究員）には、ビルマ語表記その他でお世話になった。あわせて感謝する次第である。

## 文 献

- ハイネ＝ゲルデルン, ロバート (大林太良訳)  
1975 「東南アジアにおける国家と王権の観念」大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店, pp. 263-290。
- 松本信広  
1978 『日本民族文化の起源 第3巻 東南アジアと日本文化』講談社。
- 大林太良  
1975 『日本神話の構造』弘文堂。  
1984 『東アジアの王権神話』弘文堂。
- 萩原弘明  
1977 「ビルマの古伝承」上田正昭編『日本古代文化の探究 古事記』社会思想社, pp. 241-260。
- PE MAUNG TIN and G. H. LUCE  
1923 *The Glass Palace Chronicle of the Kings of Burma*. Oxford University Press (Reprint 1976, AMS Press).
- PINNYA PYANPWA HLONHSAWYEI AHPWEI  
1991 *Hmannan Mahayazawindawgyi* (ビルマ文, 『玻璃王宮大御年代記』). Pyankyayei Wungyi Tana (5th Edition).
- 田村克己  
1987 「ビルマのオイディプス」『月刊みんぱく』1987(3):20-21。  
1991 「王権と『叛逆』——ビルマの王権をめぐる」松原正毅編『王権の位相』弘文堂, pp. 175-193。
- 土佐桂子  
1995 『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』(総合研究大学院大学提出, 学位論文)。